

ELYTRA

The Journal of
Japanese Society of Coleopterology



Vol. 4 No. 1
(July, 1976)

日本鞘翅目学会

投稿規定

1. 日本鞘翅目学会々員は会誌 ELYTRA に投稿できる。
2. 投稿内容は甲虫に関連したものに限る。
3. 投稿の掲載可否および掲載時期については編集局の合議による。
4. 原稿分量は、原則として1号1篇あたり刷上がり16頁までとし、それ以上のものは2回以上に分ける。
5. 和文の原稿は横書き、原則として現代かなづかいを用いる。
6. 原著に関しては欧文表題を付すこと。
7. 欧文の原稿には和文表題を付すこと。
8. 原著には Summary (要約) を付すことが望ましい。
9. ELYTRA に掲載される原著論文は、本会の審査委員会による審査を受け、受理されたものでなければならない。
10. 印刷代著者負担の原稿は、上記審査委員会で受理されれば、指定の号に掲載することができ、また、ページ数の制限をうけない。
(主に和文の原稿：1ページにつき ¥ 5,500, 主に英文の原稿：1ページにつき ¥ 7,500)
11. 和文の原稿では、種名は和名を主とし、学名は必要最小限にとどめる。
12. 新種および日本未記録種の記載については、必ず標本写真(原記載の場合は holotype に限る)あるいは写真に代わりうる図を付し、それらから種の特徴が判別不可能な場合には、別に図版でもってこれを補うことが望ましい。
13. 動植物の学名は、*Necydalis major* LINNÉ のように命名者は全記すること。ただし、同文中で重複する場合は省略してかまわない。
14. 文献は本文の終わりに一括して記すことが望ましい。雑誌名および巻号は省略体でよい。
(例) Ent. Rev. Japan 19, p.5~34, 1967
15. 活字の指定および校正は編集局に一任されたい。ただし、原著に関しては、初校は著者校正とする。
16. 別刷は原著に限って作成(50部以上)し、50部までは実費の半額を当会が負担、それ以上は著者の全額負担とする。(送料著者負担)
17. 掲載済の原稿は返却しない。ただし、原図・写真は希望があれば返却する。
18. 原稿の送付先は、当分の間、下記宛とする。
〒110 東京都台東区台東2-29-6 藤田 宏方、日本鞘翅目学会編集局

〔投稿に関する注意事項〕

- a. 和文は「～である」調を用いる。ただし、会話文はこれに当てはまらない。
- b. 欧文原稿は1行60字内外にタイプする。
- c. 未記録種の投稿に際しては、それが未記録であると考えた理由を明記することが望ましい。
- d. 分類の紛らわしい種の記録を行なう場合は標本写真を付すことが望ましい。なお、本会誌に用いるための標本写真撮影は当会にでも行なうので、希望者は事務局宛に連絡されたい。(1号につき4点までは無料、それ以上は実費を請求する。)
- e. 写真および図版は出来上り予定寸法の1.5倍程度に製作するとよい。
- f. 採集データ(和文)は次のように略記すればよい。
5♂♂1♀, 群馬県武尊山, 16.VI.1970, 衣笠恵士採集
- g. 原稿は編集局により一部変更されることがあるが、変更箇所が内容に及ぶ場合はあらかじめ著者の了解を求める。また、不備な原稿は書き直しを要求することもある。
- h. 原著論文の著者校正において、校正中の追加・変更は一切認めないので、完全原稿を旨とすること。

台湾産食糞コガネムシ解説〔2〕

益本仁雄

A Revision of the Coprophagid-beetles from Formosa〔2〕

By Kimio MASUMOTO

(Received Apr. 12, 1976; Accepted July 15, 1976)

**Drepanocerus sinicus* HAR. オニツノコガネ
体長4.5~5.5mm。♂の前胸背には斜後方に伸びた1対の角を具える種である。加藤が図示している。(図1) 農業試験所では2 exs. の本種を検した。

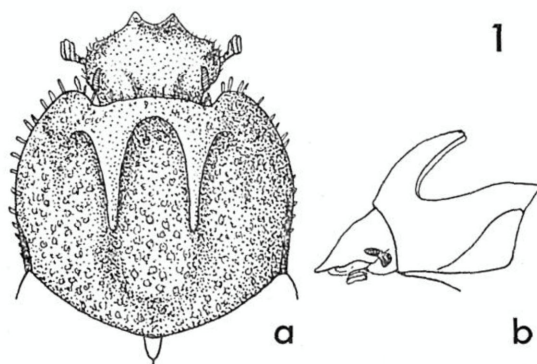


図1 *D. sinicus* HAR. a. 頭胸背 b. 同側面
(BALTHASAR, 1963 より)

4-9. *Caccobius* コエンマコガネ属

次属 *Onthophagus* と共にわれわれに馴染深い属である。よく似ているが、本属は前脛節端が切断状で内縁に対し直角をなすこと、および、前胸背前角下面がえぐられていることが区別の特徴であり、次属はこの特徴のいずれか一方か、両方の条件を満たしていない。*Caccobius* と *Onthophagus* はしばしば混乱して命名されて来たが、その原因は前脛節先端の形状が単に *Caccobius* 型であることを理由に本属に含めてしまったためである。*Onthophagus* はしばしばこのような特徴があらわれる。特に♂の性徴であったり、そうでなくても磨耗による形状変化もあるので、属の同定には慎重を要する。

三輪・中条 (1939) は台湾から3種を記録した。その内、*C. gonoderus* は *C. chujôi* である。*C. tsunoellus*

は後に述べるように *Onthophagus* である。また、野村 (1973) は新たに *C. scrofa* を記録した。

BALTHASAR (1963) の区分に従えば台湾の *Caccobius* は2亜属に分けられる。原亜属は、上面は無毛で光沢があり、稀に頭と前胸背前角部および尾節板に目立たない程の細毛を装っている。本邦に分布する *C. jessoensis* を思い浮かべればよい。別亜属 *Caccophilus* は、光沢が一般に弱いかなく、短かいが明らかな毛を装い、前基節から前胸の両側縁にのびる隆起を具えている。*C. suzukii* や *C. nikkoensis* が含まれる。

Caccobius (s. str.) *chujôi* PAUL.

チュウジョウコエンマコガネ

C. jessoensis に似るが小型で光沢が強く上翅肩部両側、先端、第4間室基部等は黄赤色である。

C. gonoderus は極めてよく似ているが頭部の形状その他で区別がつく。また、*C. chujôi* が発表された同年 (1942年) に BALTHASAR は台湾から *C. flavolimbatus* を発表しているが、これは前者の synonym とされるべきであろう。

本種は南山溪~梅峰など山地の牛、羊、人糞で見出されるが、墾丁や知本などの平地にも分布し、冬期も活動している個体が観察された。(図2-2)

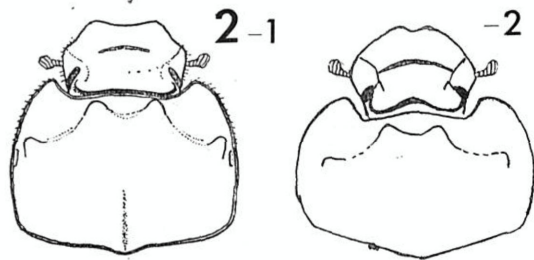


図2-1 *Caccobius gonoderus* BALT.
-2 *C. chujôi* PAUL. (BALTHASAR, 1963より)

C. (Caccophilus) scrofa BAL.

キンケコエンマコガネ*

体長3~4 mm。短卵形でかなり光沢あり、黒褐色。上面は黄色短毛を装い眼状点刻がある。

中根(1951)が中国山西省から記載した *C. shansicus* は本種の synonym という。

南山溪、奮起湖などの山地の人・獣糞で採集された。

C. (Caccophilus) unicornis (F.)

チビコエンマコガネ

本邦に分布するものと共通種である。なお、よく似た小型種の *Onthophagus centricornis* の記録(三輪や松村, 1938)が台湾からあるが、本種との混同も考えられる。台湾各地に多い。

C. (Caccophilus) tortus SHARP <New record>

ツノコエンマコガネ*

体長約4.5 mm, 黒色で光沢は余り強くない。上面は強く点刻され明らかな毛を有する。♂は頭部に1対の曲った角を具え、その間は板状隆起となる。♀は頭頂に高い隆起を有する。前胸背は♂では前方がやや急に傾斜するが♀では単純。

野村氏は当初(1973)本種が、次に述べる松村の *C. tsunoellus* とされたが、筆者の指摘により再検討され、ジャワ、スマトラ、北ベトナム、中国南部から知られる *C. tortus* であることを示唆された。(写真1, 図3)

牛糞に來集していた。湖口および蘭嶼で得られている。

(注) 松村は1938年に台湾から *C. tsunoellus* を記載した。BALTHASAR (1963)は本種を *Caccobius* に含め、さらに松村が本種によく似ているとしている *Onthophagus nagasawai* を疑問符付きで *C. tsunoellus* の synonym としている。

筆者は松村の記載に述べている直立した1対の角をもつ8 mm に達する *Caccobius* の存在に疑問を持ち、検討を行ったが、*C. tsunoellus* は実は *Caccobius* ではな

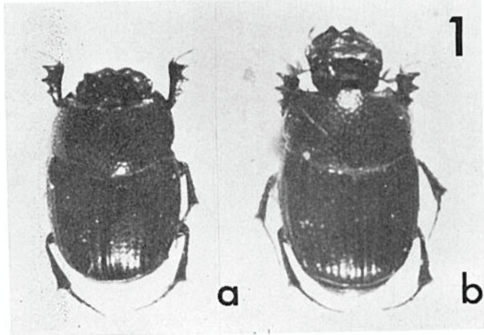


写真1 *Caccobius (Caccophilus) tortus* SHARP

a—♂ b—♀



図3 *C. (Caccophilus) tortus* SHARP の分布地域 [FORMOSA (NEW DISTRIBUITION)]

く、*Onthophagus tragus* の synonym であること、また、*O. nagasawai* は別種の synonym であるとの結論に達した。

4-10 *Onthophagus* エンマコガネ属

今日まで約1500種が知られており、台湾からは50種以上の記録がある。また、属をさらに細分化する試みがなされており、特に BALTHASAR は20に近い亜属を設けている。しかしながらそれらは、きわだった特長を持つものに限られているため、残りの大半は *Onthophagus* 亜属のままになっていて、*Aphodius* 属における亜属区分の段階までに至っていない。

(1) 松村による台湾産 *Onthophagus* について

松村は *Onthophagid-Insects from Formosa* (1938) で台湾から *Caccobius* 1種、*Onthophagus* 11種、新属新種として *Matashia* 1種を発表した。しかし記載は種の識別にとって短かく不十分なものが多く、また、*Caccobius* と *Onthophagus* の混乱、♀での記載などがあり、後日に検討することが極めてむずかしい。松村が発表した日本産の種については中根(1956)らによって整理された、台湾産については野村が検討をしているがなお不明な種が残されている。筆者はこれを踏まえさらに若干の検討を加える。

① *Caccobius tsunoellus*: 前に述べた通り *Onthophagus tragus* の synonym と考える。

② *Onthophagus agilis*: 黒色で上翅は暗褐色をし、基部に褐色紋を装う5 mmの種であるが、前胸背前縁中央に浅い窪みがあること等以外に余りはっきりとした特

長がなく、末だ何物であるか不明である。

③ *O. umenoi*: *O. trituber* の1型であろう。

④ *O. chokakurianus*: *O. trituber* の1型と思う。

台湾各地の *O. trituber* を100頭余り検したが、個体変化に加え地域変差も若干あり、一見別種にさえ見えるものもある。

⑤ *O. konoi*: 野村(1973)は独立種とし、*O. chinensis* は本種の synonym としている。

⑥ *O. kuraruanus*: BALTHASAR は *O. lenzi* の synonym としているが、明らかに独立種である。(詳細は後述)

⑦ *O. midorianus*: 野村(1973)は *O. anguicorius* の synonym であるとしており、筆者も妥当と考える。

⑧ *O. nagasawai*: “体長7mmで *C. tsunoellus* に似る”と述べられている。恐らく *O. (pseudo-) armatus* の短角型を書いたものと思う。

⑨ *O. putealis*: 早により記載され、BALTHASAR は *O. viduus* の synonym とした。野村(1973)は記載に合う早が存在するので独立種とした。筆者は好運にも多数の近似種 *O. taurinus* の標本中から本種の♂を見つけた。野村氏はこれが *O. hastifer* の記載に合うと教唆された。検討の結果、*O. putealis* は *O. hastifer* の synonym であることが確実となった。

⑩ *O. yanoi*: 野村(1973)は *O. formosanus* の synonym としているが筆者も同様に考える。

⑪ *O. egurianus*: 特長は別表の通りであるが、詳細は不明。

⑫ *O. mushensis*: *O. egurianus* と共に恐らく *Gibbonthophagus* 亜属に入り *O. taurinus* の synonym と思われるが確かではない。

⑬ *Matasha mushana*: 松村は本属が *Onthophagus* と違う点として、『前脛節は中脛節のほぼ2倍、4外歯は脛節の前半分に位置し、端刺(spur)は先端がほぼ2枝状に分れフォークを形成すると記している。BALTHASAR は *Onthophagus* の synonym で *Strandius* か *Phanaeomorphus* 亜属に該当すると考えているようであるが、これは明らかに誤りで彼が創設した、*Digitonthophagus* 亜属の特長に他ならない。また、*M. mushana* は野村(1973)によると *O. yubarinus* の synonym である。

(2) 台湾産 *Onthophagus* の解説

種々の問題があるが、一応 BALTHASAR の亜属の区分けを尊重して解説を進める。なお、ここに解説するもの以外にも数種の未同定種があるが、それらは位置づけが明らかになりしだいに本解説に折込むこととする。

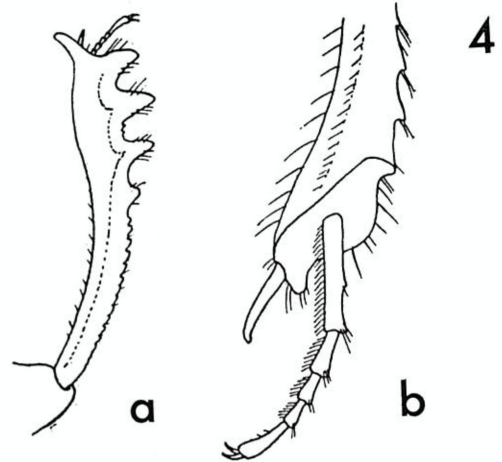


図4 *Matashia* 亜属の前脛節(a)と後脛節(b)

1) Subgenus *Matashia* MATS., 1938

(=*Digitonthophagus* BAL., 1959) (図4)

BALTHASAR は *O. bonasus* を Generotype とし *Digitonthophagus* を設立した。しかし、これは前述の通り松村の *Matashia* の特長にはかならない。野村(1973)は *Matashia* を亜属として生かしている。

O. (M.) anguliceps BOU.

カクヅエンマコガネ (Pl. 1 Fig. 1, 1a)

体長12~17mmの大型種。黒~黒褐色で頭胸背には弱い金属光沢がある。♂は頭楯前縁中央が突出し、反る。陽光が射しこむ林の牛糞に來集していた。

採集記録: 南山溪(6, 8月), 霧社(6~8月) Yuli (10月), 埔里(7月), 奮起湖(8月), 甲仙埔, 大埔林庄, Sokutsu, Raisha (三輪)

O. (M.) yubarinus MATS. ヌウバリエンマコガネ

(Pl. 1 Fig. 2, 2a) (= *Matashia mushana* MATS.)

体長8~9mm。黒褐色で上面は淡褐色短毛を装う。♂の前脛節は極めて細長く、先端内側は指状に突出する。松村(1938)は“枝分れしてフォークを形成”と書いたが、正確には枝分れしているのではなく指状突起と脛節端刺がほぼ同長で、あたかも二叉状に見えるのである。

人糞、牛糞、犬糞などに來集し、中部で少なくない。ナガスネエンマコガネと同様に好日性のようである。

採集記録: 南山溪(4~6, 8月), 廬山(9月), Tanansha(6~7月), 太魯閣(5月), 知本(6, 8月); タイプ: 霧社(6~7月)

O. (M.) lutosopictus FRM.

アカマダラエンマコガネ

FAIRMAIR により石垣島から發表された種である。体長6.5~9mmで前種によく似るが上翅基部等紋を有

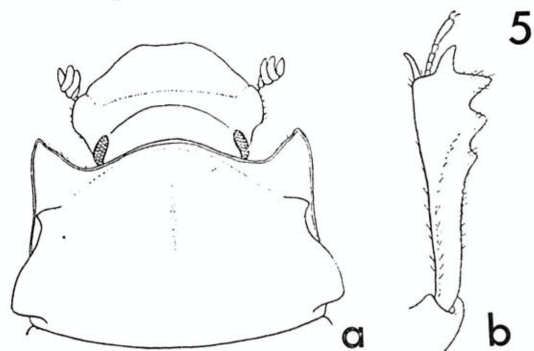


図5 *Strandius* 亜属の上半部 (a, ㉔) と前脛節 (b)

す。(詳細は後藤(1970), Ent. Rev. Jap. 22(2): 91参照のこと) 農業試験場の標本中にあるが、ラベルには“台湾”のみ記載されている。

分布記録: 恒春(三輪)

2) Subgenus *Strandius* BAL., 1935

O. lenzi が Generotype で、㉔の前胸背と前脛節の形状が本亜属の特長である。(図5)

O. (Stra.) kuraruanus MATS.

クラルエンマコガネ(Pl. 1 Fig. 3, 3a)

本種は一見 *O. lenzi* に似るが次のようにまったく別種である。

体格は幅狭く小型(8~9 mm)。頭楯は頬と区別されまく、軽く突出。㉔の前胸背中央部はより強く膨隆し、両側に一層急に落ち込む。前胸背の点刻はより大きい。上翅の間室はわずかに膨隆し、やや光沢がある。

VŠETEČKA (1939) が *O. lenzi* の亜種を書いている。それは“光沢がより強く、前胸背と尾節板は灰銅色の光沢があり、前胸背の基部は細いが明らかに縁取られ、より強い点刻を具える”とあり本種との関係が注目される。

採集記録: 関子嶺(4月) 花蓮港(10月), 墾丁(7月) 蘭嶼(3~4, 8, 10月); タイプ: 恒春(11月)

O. (Stra.) taiwanus NOM.

タイワンエンマコガネ* (Pl. 1 Fig. 4, 4a)

野村(1973)が台湾から発表した2種の *Onthophagus* の1つである。体長9.5~10.5 mm。黒色で光沢は鈍い。㉔♀共頭部に2横隆起を有し、前方の隆起は長く外縁まで伸びる。前胸背は高まり上面はやや平圧され㉔では前方および前角部に傾斜し、側部後方はえぐられその上方はヒサン状。♀は傾斜が鈍く中央前方の両側に斜の瘤状隆起を具え、そこから前角にむけやや急に傾斜する。上翅は円鋸歯状の条溝を有し、間室はやや膨み、不規則なシワと点刻を装い、肉眼では条溝が幅広く曖昧に間室を侵しているように見える。近似種は、*O. gagates*である

が、本種は小型で㉔の後方隆起が短く瘤状であること、上翅の表面が粗造であること等で容易に区別がつく。また、大型の㉔であっても前胸背後方の隆起も *O. gagates* のように翼状にならない。

採集記録: 霧社(タイプ)(7月), 嘉義(8月)

O. (Stra.) japonicus HAR. ヤマトエンマコガネ

採集記録: 霧社(7月)

O. (Stra.) gagates HOPE オオエンマコガネ

(Pl. 1 Fig. 5, 5a) (= *O. angulatus* RED.)

体長11~14.5 mm。黒色でやや光沢があり、前胸背は前方と両側に急に傾斜し、後半は三角に隆起し、㉔では後角は強く斜後方に突出する。

採集記録: 松崗(8月), 萬大社(7月), 霧社(8月), 奮起湖(8月); 港口, 阿里山, Rantaizan(三輪)

3) Subgenus *Phanaeomorphus* BAL., 1935

Generotype は *O. sycophanta* であるが *O. ater* を思い浮べればよい。㉔の前胸背の形状が亜属の主特長である。(図6)

O. (Phan.) ater
WATERH.

クロマルエンマコガネ

採集記録: 霧社

(4月), 松崗(7月), 奮起湖(5, 7~8月); *O. ater* として鳳山, 阿里山, 埔里(三輪)

O. (Phan.) cernyi BAL.

ニセクロマルエンマコガネ*

BALTHASAR は前種の variety として取扱っているが野村(1973)は独立種とし、台湾から前種と共に記録した。本種は *O. ater* に酷似するが、表面の点刻がこまかく、上翅間室は平坦でシワ状にならない。

霧社では松林の人、犬糞に集集していた。また、冬期(12月~1月)の最も優勢な糞虫であった。

採集記録: 霧社(4月, 12~1月), 松崗(6月), 奮起湖(5月), 阿里山(5~6月)

4) Subgenus *Paraphanaeomorphus* BAL., 1959

中~小型種で㉔の頭部は長細い後方に曲った角を有する。㉔の前胸背は幅広く一様に前方に向け傾斜し、後半の膨隆部はかなり短く両側はへりをなし、後角部は多少なりとも翼状の隆起を有し中央のいくぶん前方に鈍い隆起がある。(図7) Generotype は *O. phanaeicollis*.

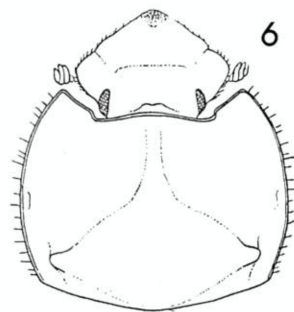


図6 *Phanaeomorphus* 亜属の上半部(㉔)

O. (Paraph.) argyropygus GIL.

トビロエンマコガネ

琉球に分布するものと同一様である。4.5~5.5mm。頭胸背は黒色で金緑光沢を有し、上翅は赤黄色で黒斑紋があり、上面に長毛を装う。♂は頭部に長角を具え、前胸背は中央両側が前方から大きくえぐられる。

採集記録：六亀（8月）、甲仙埔（三輪）

5) Subgenus *Gibbonthophagus* BAL., 1935

Generotype は *O. atripennis* であり、♂の前胸背の形状が主特長である。（図8）

O. (G.) kentingensis NOM. コンティエンマコガネ*
（Pl. 1 Fig. 7, 7a）

野村（1973）の2種目の *Onthophagus* である。

体の特長は別表の通りである。色彩は多少なりとも変化する。筆者の場合、人糞に採集していたと思う。

採集記録：墾丁（3~4、6月）（タイプ）

O. (G.) taurinus WHITE セマダラエンマコガネ

（Pl. 1 Fig. 8, 8a）

体長6~7mm。黒~黒褐色で前胸背周辺部、上翅基部、翅端の紋などは黄褐色。光沢は余り強くない。頭胸背はしばしば金属光沢を有す。前胸背前縁中央付近に1対の瘤を具える。♂の頭楯には隆起なく、頭頂には後方にのびる角を有し、早では横隆起となるが、個体差が激しい。BALTHASAR は本種を *Onthophagus* 亜属にしているがむしろ本亜属に含めるべきである。

採集記録：台湾本島各地（4~10、12月）、緑島（7月）、蘭嶼（6月）。

**O. (G.?) egurianus* MATS. エグリエンマコガネ
体形等の記述は別表の通りである。

分布記録：霧社（6月）（タイプ）

**O. (G.?) mushensis* MATS. ムシャエンマコガネ

10

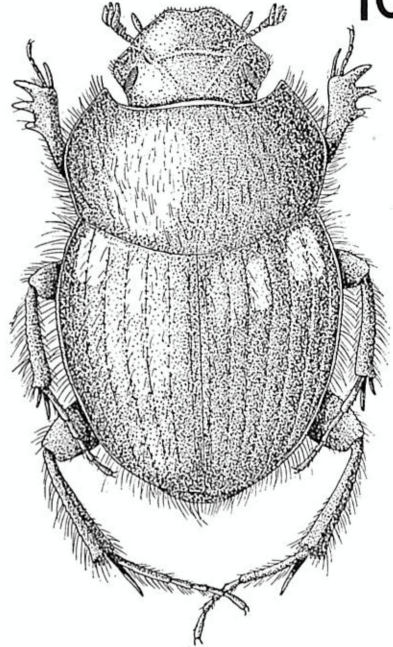


図10 *C. kanoi* MATS. (= *O. chinensis*)
(BALTHASAR, 1963より)

体形等の記述は別表の通りである。

分布記録：霧社（5月）（タイプ）

6) Subgenus *Indachorius* BAL., 1941

小型（3~5.5mm）で上面は光沢あり、短~長毛を装い、上翅には紋がある。前脛節は通常3外歯（図9）であることが主要な特長で、頭部や前胸背の形状は単純。Generotype は *O. nefarius*。

O. (Inda.) koshunensis BAL.

コオシエンマコガネ*（Pl. 1 Fig. 9）

体長3.5~4mm。黒~黒褐色で、灰黄色の毛を有し、

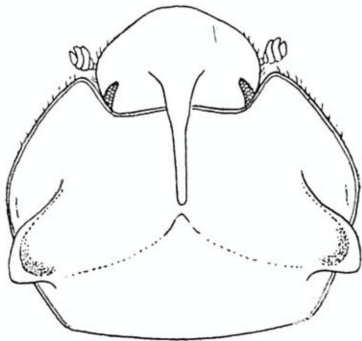


図7 *Paraphanaecomorphus* 亜属 (♂)
の上半部

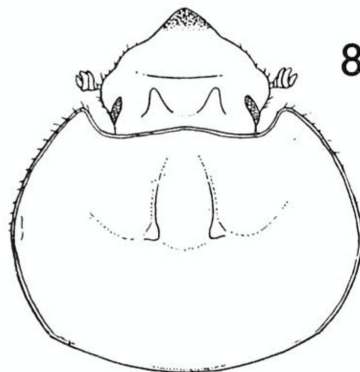


図8 *Gibbonthophagus* 亜属 (♂)
の上半部

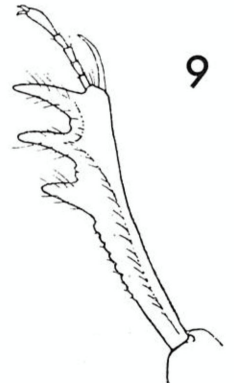


図9 *Indachorius* 亜属の前脛節
の上半部

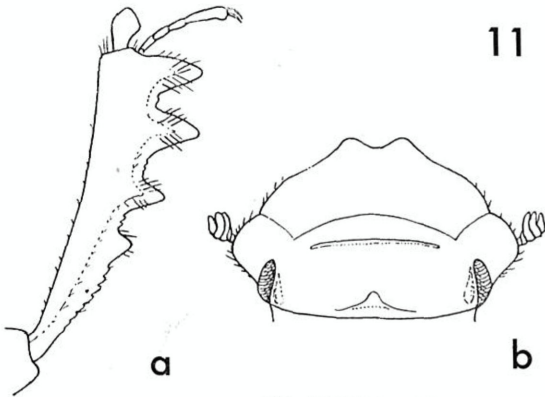


図11 *Colobonthophagus* 亜属の前脛節 (a, ♂) と頭部 (b, ♀)

上翅には黄色紋を基部と翅端に具える。人糞に來集していた。

採集記録：墾丁（3～5，8月）

O. (Inda.) konoii MATS. コウノエンマコガネ

(=*O. chinensis* BAL.) (図10) (P-5)

体長4 mm. 前種によく似るが上翅は肩部と翅端のみに紋を有し，前胸背の点刻は多少とも眼状。

採集記録：霧社（5月）；Naihonpo（7月）(タイプ)

7) Subgenus *Colobonthophagus* BAL., 1935

第一間室の基部は小さな瘤状隆起を有す。また，♂の前脛節端刺はヘラ状をしている。Generotype は *O. tragus*. (図11)

O. (Col.) tragus (F.) ツノフトエンマコガネ

(Pl. 1 Fig. 6, 6a) (= *C. tsunoellus* MATS.)

体長7～9.5 mm. 黒色で光沢あり。♂の大型種は両眼間に1対の垂直角を具え，小型では短かい3本の角となる。♀は前頭と頭楯付近に相接した2隆起と両眼中央に瘤状小角を有す。人，牛糞に來集していた。墾丁における冬期（12～1月）の最優勢種であった。

本種は一見 *O. (s. str.) (pseudo-) armatus* によく似るが亜属の特長を注意すれば区別がつく。

採集記録：墾丁（5，7～8，12～1月），太魯閣（5月），湖口（10月），緑島（7月），蘭嶼（4～5，7，10月）

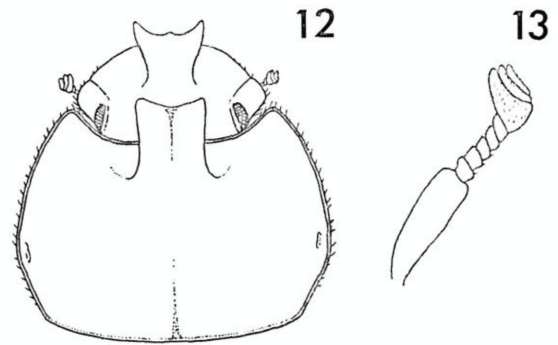


図12 *O. (Col.) lunatus* HAR.

図13 *Parascatonomus* 亜属の触角

**O. (Col.) lunatus* HAR.

ヒメエンマコガネ (図12)

体長8～10 mm. 黒色で上半部は光沢あり。体形的に特長のある種である。最近の記録はなく，分布もあやしい。

試験場には標本がある。(恒春のラベル)

分布記録：埔里（三輪）

8) Subgenus *Parascatonomus* PAUL., 1932

O. discedens が Generotype であり，触角の第一節が強大で，また，頭楯に前方に突き出た突起を有するグループである。(図13)

O. (Parasca.) tricornis (WIED.)

ミツノエンマコガネ (Pl. 1 Fig. 10)

日本でもよく知られた大型種である。台湾では少なくとも燈火に飛來することもあったし，また，糞にも來集していた。

採集記録：墾丁（7～8月），陽明山（8月），台北，南投，埔里，六龜（三輪）

O. (Parasca.) discedens SHARP

オオツヤマルエンマコガネ

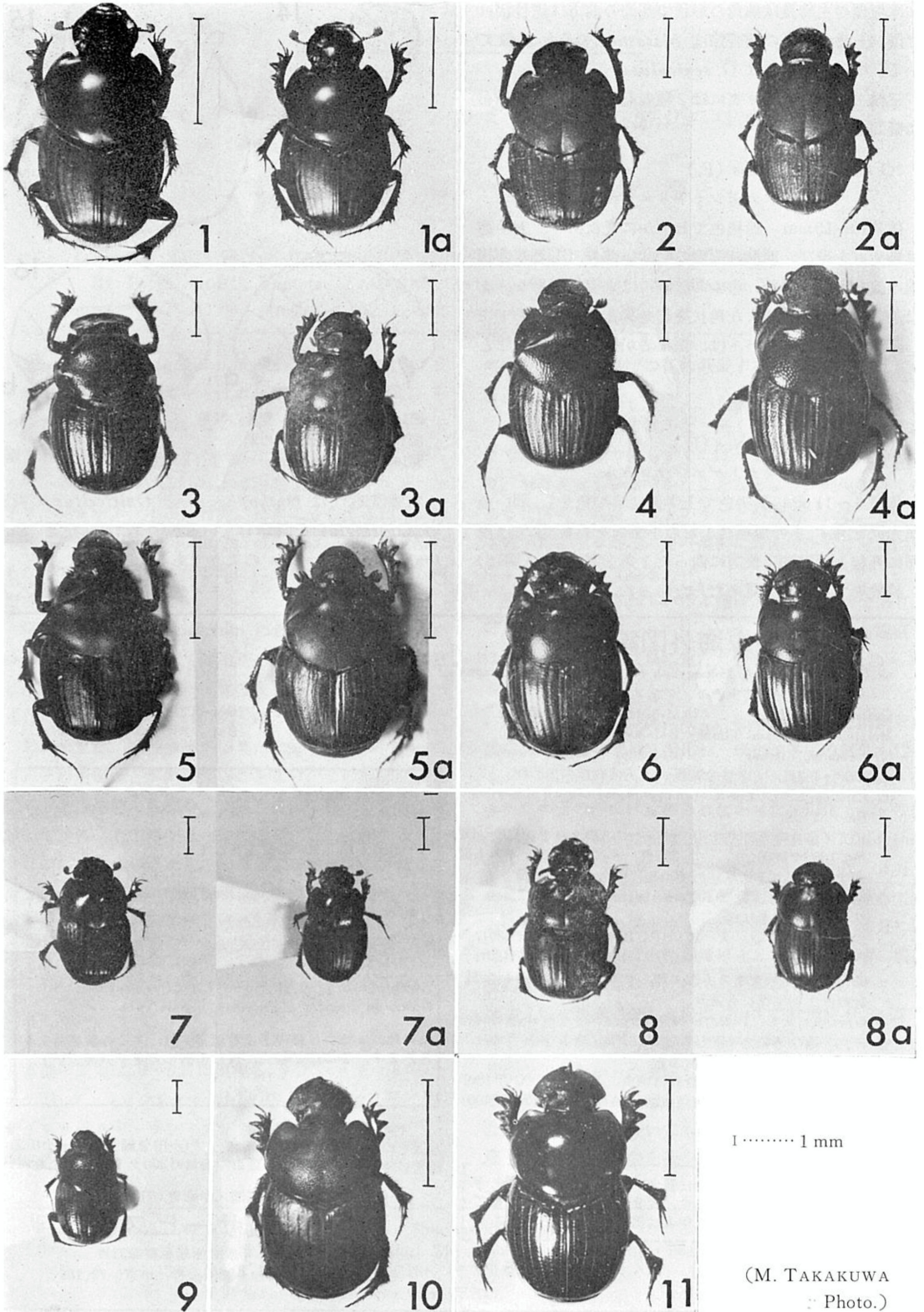
最近日本でも琉球で採集されている種である。(Pl. 1 Fig. 11 (石垣島産)) 黒色で光沢が強く，頭楯中央が切れ込み，その中央から指状突起がのびている。

分布記録：萬大社；阿里山（加藤1933）

Explanation of Plate 1

- | | | | | | |
|--|---|---------|---|---|---------|
| 1. <i>O. (M.) anguliceps</i> BOU. | ♂ | 1 a, 同♀ | 2. <i>O. (M.) yubarinus</i> MATS. | ♂ | 2 a, 同♀ |
| 3. <i>O. (Stra.) kuraruanus</i> MATS. | ♂ | 3 a, 同♀ | 4. <i>O. (Stra.) taiwanus</i> NOM. | ♂ | 4 a, 同♀ |
| 5. <i>O. (Stra.) gagates</i> HOPE. | ♂ | 5 a, 同♀ | 6. <i>O. (Col.) tragus</i> (F.) | ♂ | 6 a, 同♀ |
| 7. <i>O. (G.) kentingensis</i> NOM. | ♂ | 7 a, 同♀ | 8. <i>O. (G.) taurinus</i> WHITE | ♂ | 8 a, 同♀ |
| (Paratype) | | | | | |
| 9. <i>O. (Inda.) koshunensis</i> BAL. | | | 10. <i>O. (Parasca.) tricornis</i> (WIED) | | |
| 11. <i>O. (Parasca.) discedens</i> SHARP | | | | | |

Plate 1



(M. TAKAKUWA
: Photo.)

9) Subgenus *Serrophorus* BAL., 1935

本亜属の主特長は触角の形状で基節の前方は鋸目状。

(図14) また、♂の前脛節は *Matashia* のそれと似ている。Generotype は *O. seniculus*。

三輪・中条のカタログには2種の記録があるが、分布に疑問をもつ。

**O.* (Ser.) *seniculus* (F.)

アカボシミドリエンマコガネ

体長10~15mm. 暗褐色でわずかに光沢あり、上半部は銅光沢を帯び、前胸背両側の幅広い部分、上翅基部翅端の紋などは黄褐色。♂の両眼間には小突起があり、また、前胸背前方に強大な角状隆起を具える。(図15)

試験場の標本のラベルは、採集者が徐、地名が別館となっている。

分布記録：恒春(三輪)

**O.* (Ser.) *sagittarius* (F.)

フタトゲエンマコガネ

体長8~11mm. 黄褐色で上半部は暗褐色をし、弱い金属光沢を有す。♂の頭楯は1対の小突起を具え、♀では前頭に隆起と両眼間に後方に曲った1角を有する。(図16)

試験場では標本が見あたらなかった。

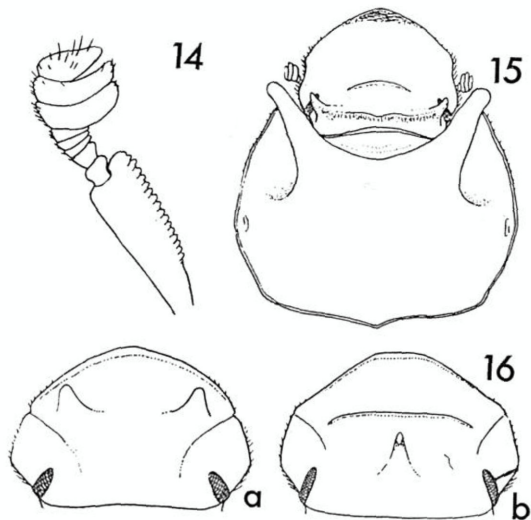


図14 *Serrophorus* 亜属の触角

図15 *O. seniculus* の頭部

図16 *O. sagittarius* の頭部 (a-♂, b-♀)

加藤(1933)は *Onthophagus* と *Oniticellus* の両属の *sagittarius* を図示しているが後者は単なる *Liatongus phanaeoides* のようである。

(エンマコガネ属次回へ続く)

TT S甲虫海外図鑑・図書

◆ Duffy, E. A. J. A Monograph of the Immature Stages of Timber Beetles.

カミキリムシ科幼虫のモノグラフ

Oriental Timber. (BM-301) ¥12,010 (〒440).

British & Imported Timber (BM-304) ¥6,560 (〒400).

Neotropical Timber (BM-306) ¥9,840 (〒440).

各巻250~450頁. クロス製版. 大英博物館の出版物.

Australian Timber (BM-302) ¥7,390 (〒400).

African Timber (BM-305) ¥8,040 (〒440).

◆ Linsley, E. G. The Cerambycidae of North American Part 1-5.

北アメリカのカミキリ相 1~5 5巻セット (UC-s05)

¥6,105 (〒860). 832頁. 36図版. 225テキスト図.

北アメリカのカミキリの決定版. 大変安い出版物です.

◆ Gressitt, J. L. et al. Cerambycid-beetles of Laos.

ラオスのカミキリ相

クロス版 (PI-B24) ¥6,150 (〒480).

ペーパーバックス (PI-O24) ¥5,650 (〒480).

657頁. 57図版テキスト図多数. ラオスのカミキリ1156種

記載. 生物地理にも言及.

◆ Gressitt, J. L. Insects of Micronesia; Cerambycidae.

ミクロネシアのカミキリ相 (IM-172) ¥1,300 (〒360).

126頁. 33図. 新種の記載多数

◆ 玉貫光一 原色世界の甲虫 特価 ¥6,500 (〒790)

◆ 桑山 寛 南千島昆虫誌 ¥1,800 (〒400)

◆ "Pacific Insects" vol. 1(1959) 480pp.

(PI-601) ¥2,590 (〒440).

甲虫関係は下記の論文を含みます.

Gressitt, J. L. Longicorn Beetles from New Guinea, I. p. 59-172.

Darlington, P. J. The Bembidion & Trochus (Carabidae) of The Malay Archipelago. p. 331-346.

Zwaluwenburg, R. H. Some Type Designation, with Notes on Pacific Elateridae. p. 347-414.

この他、本誌には毎巻甲虫の記事多数、多くの重要論文を含みます。巻単位で販売、頁数の割に大変安い雑誌です。

ご注文・ご予約ともハガキに署名・捺印の上お申し越し下さい。直ちにお送り致します。代金は到着後5日以内にご送金下さい。(但し、未成年者は保護者の署名・捺印も)。

在庫リスト(要〒100) リスト発行年4~5回

お近くの方は小社カタログショップ(小田急経堂駅前・小田急経堂ビル12F1221号)へ! 昆虫洋書常時300タイトル以上在庫。

昆虫・動植物海外図鑑・学術書(旧パピヨン)

東京通販サービス社

〒156 東京・千歳郵便局私書箱33号

TEL (03) 426-6012 郵便振替 東京0-73,156

クビアカモモプトホソカミキリの生態について

郷 遠・田村 保・分島徹人・山地 治

Ecological notes on *Kurarua rhopalophoroides* HAYASHI (Cerambycidae, Col.)By Tooshi GOH^{A)}, Tamotsu TAMURA^{B)}, Tetsuto WAKEJIMA^{C)}, and Osamu YAMAJI^{D)}

(Received Dec. 19, 1975; Accepted July 15, 1976)

Kurarua rhopalophoroides HAYASHI (1951) クビアカモモプトホソカミキリは本州、西表島に分布し、その分布域が限定されていることや、原記載以来、雄が未知であることなどが、その特異な形態とあいまって知られている。Genus *Kurarua* は現在までに、インド、ラオス、ベトナム、中国、台湾、日本に分布する10種が知られ、日本の *K. rhopalophoroides* は、本属の北限にあっている。また、他の地区に分布する種では雄も報告されている⁴⁾。

従来、この属は *Molorchini* に属していたが、GRESSITT and RONDON (1970)⁴⁾ が *Cleomenini* に移籍し、わが国でも草間慶一・林匡夫 (1971)¹⁰⁾、草間慶一 (1973)¹²⁾、中根猛彦 (1973)¹⁵⁾ はこれに準じている。

われわれは、本種の雄がいまだに知られていないこと、その所属などが興味深いことより、この数年間にわたり、その生態の観察を奈良県春日山、岡山県臥牛山において試み、若干の知見を得たので、ここに報告する。

この報文作成に当たり、種々御教示賜った小比賀正敬博士、竹内恭博士、柴田泰利氏、林匡夫博士、黒沢良彦博士、日頃御教示および文献のお世話を賜っている小島圭三博士、中村慎吾氏、食樹同定を賜わった須藤彰司博士、資料蒐集に協力の郷直樹の各位に謝意を表する。

成虫について

本種の成虫は、4~6月に出現し、クリ⁶⁾・コデマリ¹²⁾・カエデ¹²⁾・ウシコロン(カマツカ)^{12,15)}・タラヨウ^{12,17,16,17)}・ザイフリボク¹⁷⁾・ウワミズザクラ¹⁷⁾・イロハカエデ¹⁷⁾・ガマズミ類¹⁷⁾・ミズキの1種¹⁷⁾・コガクウツギ¹⁷⁾・ソヨ

ゴ¹⁷⁾・ツゲの1種¹⁷⁾の花に飛来することが報告されている。

本種の成虫の動きはかなり鈍く¹⁶⁾、花をゆすると地面まで落下し、その後もすぐには飛び立とうとしなかったり、飛行速度もゆるやかなことなどより、発生木近くにある花に多く集来するということが考えられる。また、本種が葉に止る時は、その葉裏に好んで止ることが山地により観察されている。

現在まで採集されている本種は、すべて雌性であり、野外ではまだ観察されていないが、屋内における観察では、時に疑似交尾(単に重なり合う程度)が認められる。

成虫雌の卵子の形成は遅く、郷の行なった屋内飼育の観察では、8~9月に羽化し、成虫越冬中の個体を12~4月上旬にかけ行なった10個体ほどの剖検処見では、卵巢中に卵子の形成は認められなかった。Life cycle の似ている(ほぼ同時に羽化し、成虫越冬する) *Molorchus minor* シラホシヒゲナガコバネカミキリでは、4月上旬には未成熟ながら、かなり発育した卵子を内蔵しているのに比べ、その発育はきわめて悪いようで、4月に材より脱出した時点でも抱卵はほとんど認められず、脱出後約1ヵ月経たもので、かつ、その間にコデマリ・ガマズミ等を後食させたものについての抱卵状態を調べたもので、最高19卵、最小2卵で、その時点でいまだに抱卵を認めなかった個体もあった。これは屋内飼育による欠陥ではないかと考えたが、1975年4月、臥牛山で得た飼室中の成虫についても変りがなかったので、本種の卵子の成熟には、脱出後少なくとも約1ヵ月の時日と、多

Present address: A) 5, Minamiyamabushi-cho, Shinjuku-ku, Tokyo (〒162)

B) 2-1-32, Miyakojima-kitadōri, Miyakojima-ku, Osaka City (〒534)

C) 13-15, Daianzi, Okayama City (〒760)

D) 9-9, Sachi-cho, Okayama City (〒700)

くの後食を必要とするのではないかと郷は推察したが、一方、田村は、春日山産のもので、羽脱直後のものにすでに抱卵を確認せる個体があり、さらに5月はじめの臥牛山ソヨゴよりの脱出個体も後食なしに抱卵していたのを観察している。これらの相違は今後の観察を待つこととしても、個体により抱卵の多少、有無のばらつきが大きいようである。

食 樹

本種の幼虫は、春日山では *Ilex rotunda* THUNB. クロガネモチ、臥牛山では *Ilex pedunculosa* MIQ. ソヨゴ (Fig. 1) といずれも *Ilex* 属の枯死部に食入しているのが観察された。草間¹²⁾は *Illicium religiosum* SIEB. et ZUCC. シキミを本種の host としているが、これは樹種の誤認であったことがわかったので訂正したい。これら2種の host のほかに、本種が訪花する *Ilex* 属のものに、その寄生を認める可能性は充分にある。

卵および産卵

卵の形態はきわめて特異で (Fig. 3), 白色卵形。縦径0.99~1.15 mm, 横径0.43~0.50 mm, 一方がやや太目で、両端には弁状の突起物がある。卵表面には細かい網目模様 (長径0.0165~0.0247 mm) があり、卵の一方の太い半分には網目模様のほかに、微細な棘突起 (約0.008 mm くらいの長さ) が無数に生えているが、卵の中ほどよりこの突起はしだいに短くなり、卵の細い端より約 $\frac{1}{3}$ の辺で、この突起は認められなくなる。

卵の両端の弁状突起は繫留ブイ状で、卵の太い端にあるものは、その径約0.115 mm くらいで、細い端のものは、0.050~0.082 mm くらい。

本種の雄が未知であることは、例えば生態の異なるために採集されないとか、あるいは雌雄同形で識別しがたいたとか考えられるため、1974年8月17~18日にわたり、臥牛山に本種の蛹を求め、約20個体の蛹を得たが、その



Fig. 1 実のなっている寄生樹 (ソヨゴ、臥牛山、8月) ……Host plant with berries. (*Ilex pedunculosa*, August, at Mt. Gagyuzan.)

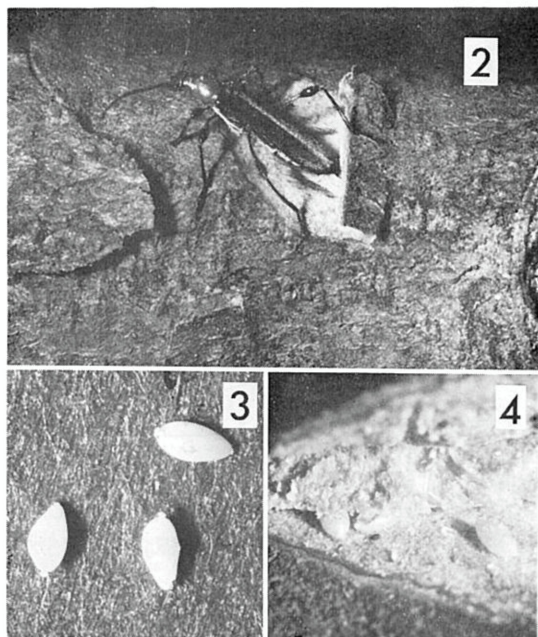


Fig. 2 切創に産卵中の成虫 ……An adult in oviposition in a Kerf.

Fig. 3 卵……Eggs.

Fig. 4 切創に産卵された卵……Eggs laid in the Kerf.

形態はいずれも雌性を示していた^{2,3,4)}。また、雌性単為生殖ということも考え、1975年4月28~29日にかけ、臥牛山で、まだ蛹室中にある越冬成虫を16個体採集し、各々分離飼育し、コデマリ・ガマズミを後食させ産卵を試み、その中の2個体が、5月16日 (3卵)、同17日 (3卵)、同24日 (2卵)、同27日 (3卵)、といずれも host のソヨゴに人工的に作った切創に産卵するのを認めた。これらの卵はなぜか孵化しなかった (Fig. 4)。

よって本種は、交尾せずに産卵したという以外に、その生殖についてはわかっていない。なお、この生殖については、引続いて観察中であるので、知見があったら御教示賜わりたい。

幼虫の食入状況

おそらくは樹皮下で孵化したと考えられる幼虫は、樹皮裏面と辺材表層部を併せ食進し、その食痕は、幼虫体に比べ幅広く不定形に蛇行し (Fig. 5), その幅は体長10 mm の幼虫のもので約3 mm 前後で、所々に憩室状の広場を作り、この広場は時に10 mm 幅にも及び、これらの食痕内には常に褐色の樹皮部と、淡色の辺材部の細粉が混じり、さらさらした砂状の、あたかもスリ胡麻のような粉末が充満し、これは *Molorchus kobotokensis* コボトケヒゲナゴコバネカミキリ, *M. kojimai* コジマヒゲナゴコバネカミキリなどの所見と似ている。また、本

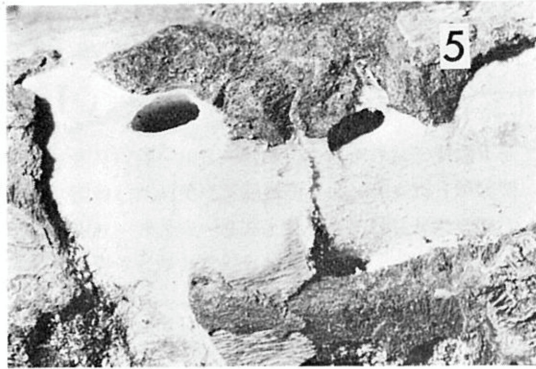


Fig. 5 幼虫による樹皮下の食跡と穿孔を示す。
Work of larvae, showing the mines and bores
under bark.

種の食入している host を外部より見ると、時に樹皮が点々と欠損して不定形の穴が見られる (Fig. 11)。これは食跡に沿って表皮が欠損してできたもので、本種の寄生(あるいは以前寄生していた)を外部よりほぼ見分けられる。

終令(10.5~13mm)に達した幼虫は、翌々年春に辺材部に穿孔して蛹室を作る。この時期は屋内飼育のものは早いもので2~3月、野外では4月28日にすでに作られているのを観察した。この材部への穿孔は、樹皮下の食跡の一部の片隅に接して作られ、その付近の食痕は多くの場合、憩室状に広がっており、穿孔は長径3~4mm、短径1.5~2.0mmの長円形で、長い縁の一方は、ややえぐられて落ち込んでいる (Fig. 5)。また、観察した例では、すべての孔の長軸が、ほぼ host の木目と平行して作られていた。前述の *Molorchus* の類では、多くは木目と直角あるいは斜めになる。この穿孔は時に1~2mmくらい作られて中止されていることもあり、また孔の入口には、オガ屑状の繊維が軽くつまっていて、これはまだ本種が中に存在していることを示し、すでに脱出してしまっている孔には認められず、孔の色彩も黒

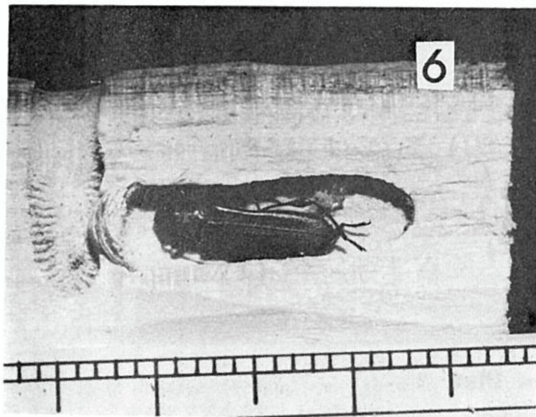


Fig. 6 蛹室 (蛹室外側の鋸目状のヒダに注目)
Pupal cell. (Note the notch outside the cell.)

ずんでいる。

蛹室について (Fig. 6, 7)

樹皮下より材部に穿孔した幼虫は、ほぼ食入孔と同じ長円形の孔を垂直に6~13mm食進し、その先端部より2~3mm、時に5mm後退して、その孔に直角に側孔を作り蛹室とする。多くの観察例で、蛹室が材表面より20mm以上深部に作られていた例はなかった。また、憩室状に丸くなった穿孔のつき当りは、共通して、その断面が長円形の孔の遠位端両側部に沿い、つき当りより蛹室入口上部付近まで、幼虫の大腮によりえぐられた美しい横ひだ状の彫刻模様を残す (Fig. 6)。蛹室は食入孔と同じ長円形扁平で、長径13~15mm、幅3~4mm、厚さ1.5~2.0mmの扁平俵状。蛹室入口は、1~2mmの厚さにうすく栓をされ、その栓の内面は細かい木屑の粉末を固めて壁となり、外面は長く粗い木の繊維を縦に並べて栓をされている (この粗い繊維は、どうして作られたか不思議なくらい粗大なものであるが、もしかすると、蛹室外部の粗い横ひだ模様と関係があるかもしれない。——というのは、その粗いひだの陥没部分がこれに当たっているかもしれないという考えである)。

蛹室を半分まで作り中止している例が2例観察され、また、蛹室内の前蛹、蛹はいずれも蛹室入口に向っているが、一例だけ逆方向に向って蛹化し、羽化後、蛹室の端部より新しく飛孔を穿って脱出した例がある (Fig. 7-b)。蛹室は材表と平行に走り、また、蛹室の扁平な面は材表とほぼ直角になっている。すなわち蛹、成虫は材表面に対して90°横向きになる。長円形の食入孔は前述の

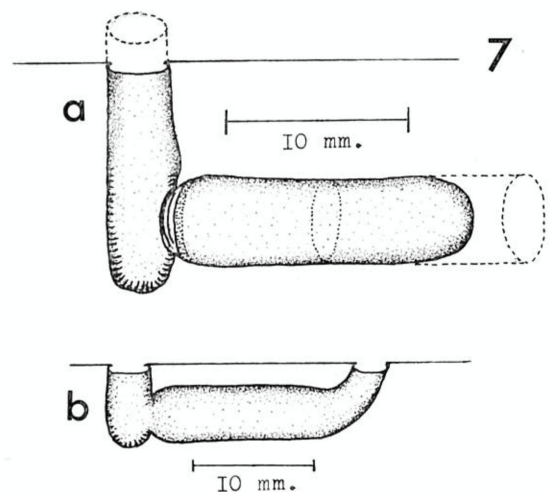
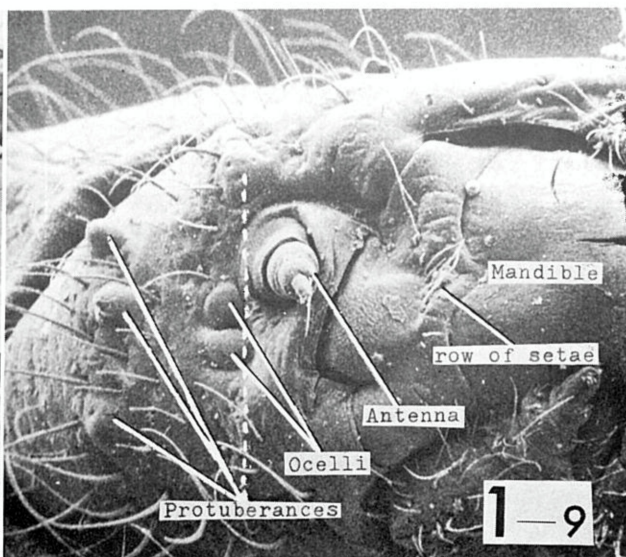
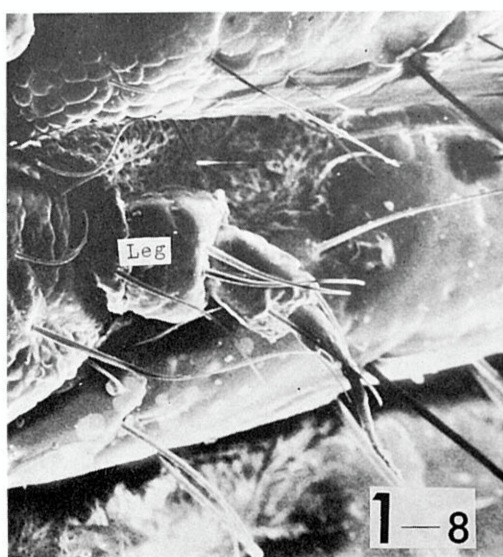
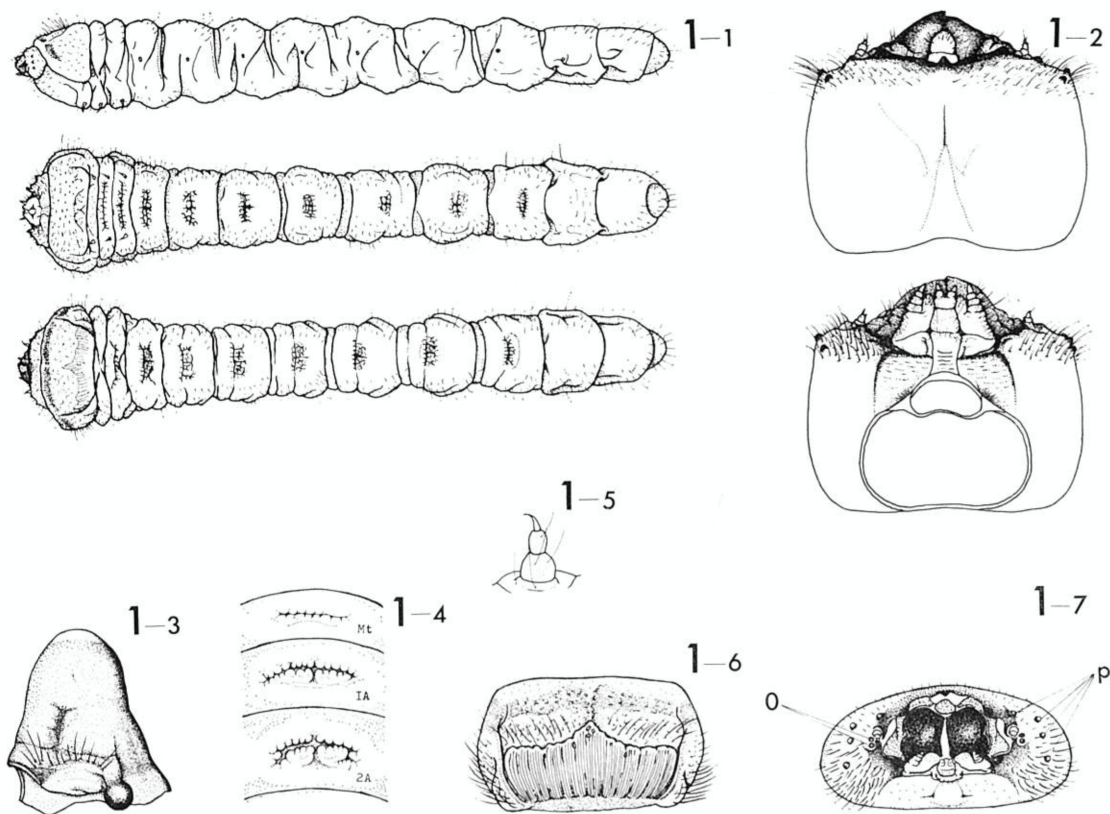


Fig. 7 蛹室, a=通常のもの b=後方より脱出した例
Pupal cell. (a) Normal, (b) emerged from rear
right) exit.

Plate 2



Explanation of Plate 2

1-1 終令幼虫……Mature larva.

1-2 幼虫の頭部（前額前縁の突起に注目）

Head of larva. (Note a protrusion at anterior margin of the front.)

(右ページ下段へ)

通り、その長軸が木目とはほぼ平行であり、また、蛹室も同様で、両者の扁平面はほぼ同一平面に連なる。

蛹化および羽化、脱出

1949年8月17日～18日、臥牛山で採集された前蛹4個体につき観察した結果は下記の通りで、16～18日が蛹期間と考えられ、8月末～9月上旬と遅く蛹化したものは蛹期間が長引くものと考えられる。

蛹 化	羽 化	蛹 期 間
8月19日	9月4日	16日
8月20日	9月5日	16日
8月25日	9月12日	18日
9月6日	10月1日	25日

羽化はMolorchini等によく見られるごとく、蛹室外では脱皮が体下面だけ進行早く、腹部がそり反ってしまい、脱殻は拳上した翅と、腹部の先端、触角が上方1ヶ所に集まった点にひっかかり、うまくいかない。

羽化した成虫は、蛹室内にて越冬し、翌年4月上旬より5月上旬にかけ、幼虫時に作った食入孔を逆もどりし、多くの場合、穿孔部真上の樹皮に、長径3mm、短径1.5mm前後の、やや半月状の脱出孔を作り外部に出るが、穿孔部付近の樹皮に欠損部のある場合は、飛孔を作らずに、そこより外部に脱出している例もかなり見受けられた。1975年4月28～29日の臥牛山における観察では、その時期にすでに約半数前後と見られるものが、飛孔を作り脱出していた。

幼虫の形態 (Plate 1)

帯黄白色で、細長い円筒形。頭部は横長の四角ばった長円形。上唇は縦長の長円形。口上剛毛2対。前額前縁は正中線に向って湾入し、正中線は小さな三角状に鋭く突出し、前縁部は茶褐色で不明瞭な斜め状のシワが浅く走り、その後方の無色部には微毛疎生し、側面に向うほど、その毛は太く長くなる。頬剛毛は茶褐色で太く密生する。正中縫合線は後半部のみ明らかで、前額縫合線は不明瞭。

触角は基節共に淡黄色半透明で、太さは、第1節：第2節：第3節＝4：3：1。第3節と付属突起には長毛

が生えている。触角の上方に1個、頬の前方の部に縦に3個並んで剛毛の中に淡褐色の疣状隆起がある。単眼は2個縦列し、小さくレンズ状に丸く突出し、その眼底部周囲に黒色沈着物が透けて見え、ほぼ同大なるも、下眼の方がやや大きい。小あごは、淡黄色半透明、いずれも長毛多く、小あごひげ第1節と、小あご担ひげ節の裏面には、刺毛を伴った微細な付加節を認める。

大腮は丸ノミ状。基部は淡黄褐色半透明で、他は黒褐色なるも、先端縁は淡色半透明。外側の基部には14～15本の刺毛が横列する。前胸部は淡黄白色で、前胸背前縁近くに沿い淡褐色帯が走り、これは正中線、前胸側線の部で寸断され、前翼状部の部で少し幅広くなる。前胸背前半部において、正中線はやや隆起し全体的にやや横シワ状で、茶褐色微毛がやや密生し、後方では長毛となる。前胸背後半部においては、全体的に隆起し、前縁中央部はやや突出し、全域にわたり、レコードの溝状に細かく判然とした美しい縦溝状で毛はほとんどなく、後部近くでは深目の溝を混える。前翼状部は微毛が疎生し、後方上部の毛は長い。前腹板、上側板は境界不明瞭で、共に横シワ状なるも、後方は縦シワ状で左右に長毛を生ずるが、前腹板の中央部は微毛。

真腹板は明瞭で縦シワ状になり、前縁近くに左右2本づつの微毛が横列する。

各胸腹節の歩行隆起上には、背面では後胸節、第1～第7腹節にかけ、また、腹面では、中、後胸節、第1～第7腹節にかけ顆粒が認められ、背面後胸節のものは痕跡的。この顆粒は背面のものでは、歩行隆起の正中線に深く縦溝が走り、その上方を横溝がほぼT字形に交差し、顆粒はこれらの溝の周辺に沿い分布するが、第7腹節では、ほぼ2列状となり、腹面のものでは、ほぼ2列状に顆粒が並ぶ。

気門は長円形で、気門輪は黄色。側板盤状部は、第1～第5腹節に認め、第6～第7腹節のものは不明瞭で、各々淡褐色の長毛を1本づつ伴う。側板隆起は、第8、第9腹節に認められ、また、腹節の第3～第7腹節間の皮膚は長い。各胸腹節の背面および腹面の左右には長毛やや密生し、第2～第7腹節の側面は、気門の前方が深く縦シワ状にくびれる。第10腹節は長く先端丸まり、肛門3裂し、その周囲を長毛がとり巻く。

1-3 幼虫大腮(刺毛列に注目)……Mandible of larva. (Note the row of setae)

1-4 幼虫、背面歩行隆起。Mt=後胸節 A=腹節

Dorsal ampullae of larva. (Mt=Metathorax, A=Abdominal segments.)

1-5 脚……Leg. 1-6 幼虫の前胸部……Prothorax of larva.

1-7 幼虫頭部前面図頰の3つの隆起を示す。P=隆起 O=単眼

Head of larva. (Frontal view, showing 3 protuberances on the gena. P=Protuberances, O=Ocelli.)

1-8, 1-9 走査電子顕微鏡による(A)頭部前面(B)脚(小比賀正敬博士による)固定により、生体と多少感じが変わる。×150倍。

……Scannig electron micrographs of (A) frontal view of head and (B) leg. Magnification×150 (M. Obika)

(Materials were fixed in Carnoy, post-fixed in 1%OsO₄)

終令幼虫は11.88~13.20mmで、作図に使用した個体は、体長13.2mm、前胸幅2.7mm、頭幅1.8mmであった。被検材料は臥牛山で1974年8月17~18日、1975年4月28~29日に採集した生品10個体および1973年飼育の春日山産のもの3個体より、また、春に孵化したと思われる幼虫の10月に計測したものでは、9.2mm前後の長さであった。

幼虫は頬の部に3個の疣状突起が縦列し、前額前縁中央部が三角状に突出することや、歩行隆起上にやや不明瞭ながら果粒のある点を除いては、他の形態は DUFFY (1968)³⁾ の記載している *Artimpaza obscura* (Cleomenini) にもっとも似ていると考えられるが、実物に接していないので細かい点はわからない。他の Cleomenini の幼虫とは、*Dere*^{2,7,9,13)} は単眼が1個で、*Mimistena setigera* ケナガカミキリ⁸⁾ とも単眼を欠き、小あごの付加節がない等の点で異なり、また、一見した感じは Molorchini のものに似ているが、この類が単眼を欠いているか、あるいは1個であるという点で異なる。

本邦においては、現在までに、単眼2個を有する幼虫の報告例はなく、本種が初めてであることより、現在までにわかっている幼虫との区別は、単眼の数だけで容易にでき得ることになる。

なお、GRESSIT et RONDON の処置については、*Kurarua* の幼虫自体、種々の特異点を持っていることより、一概に論ずることは難しい。また、わが国です

に報告されている Cleomenini 2種に、本種を加えてみても、お互いかなりの相違点がある。

ただ本種の幼虫に関しては、一般的形状は、より Molorchini に似ているにもかかわらず、今までに記載されたものにより定義づけられた Molorchini に入らないこと(例えば単眼の数)であり、一方、*Artimpaza* の幼虫について、DUFFY³⁾ は、本種が Clytini の後に従属していると考えられる Cleomenini の中であって、多くの点で、Clytini よりむしろ Molorchini に近い形態を示していると指摘している。同じような悩みは Rhopalophorini にもある(CRAIGHEAD, 1923)。将来、これらを再検討する可能性がまったくないとはいえない。

なお、本種の幼虫の形態については、中村慎吾他(1975)¹⁴⁾ の記載があるが、これによると、当報文でのべた形態とかなり相違があることより、これは他の幼虫の誤認と考えられる。

蛹の形態 (Fig. 8)

体は扁平紡錘形で乳白色。頭部は腹面に向かって強く曲り、頭頂はドーム状に丸く突出し滑らか。顔面触角間は横に隆起し、左右に2本(時に1本)の微毛が生え、中央は浅く横ジワ状で正中溝は、その隆起上部にわずかに痕跡的に凹みを作るのみで、隆起の下は凹み、正中部は横ジワ状で、その左右は円形に各々隆起し、上唇は正中中部凹む。大腿上には1本の微細な刺毛あり。触角間は広く、触角は体側に沿い下降し、中肢脛節端の内側より内転上行し、中肢脛節と、上翅縁の交わった点にほぼ達する。前胸部は幅と長さほぼ等しく、前縁と後縁近くでくびれ、前縁中央やや上反し、前縁中央部は不明瞭な小さい数個の乳頭状突起が、かすかに認められ、中には微毛を伴っているものもある。その後方は正中部に沿い弱い横ジワが並び軽く凹む。前胸背中ほどの側縁はわずかに突出し、前縁幅より後縁幅の方が少し広い。前胸背の毛は、前縁部中央近くに2~3本の微毛と、中央部の少し隆起した部分上の左右に連なると、後方左右に少し離れて比較的大きな毛の集団がある。

中胸部は後方左右に2~3本の

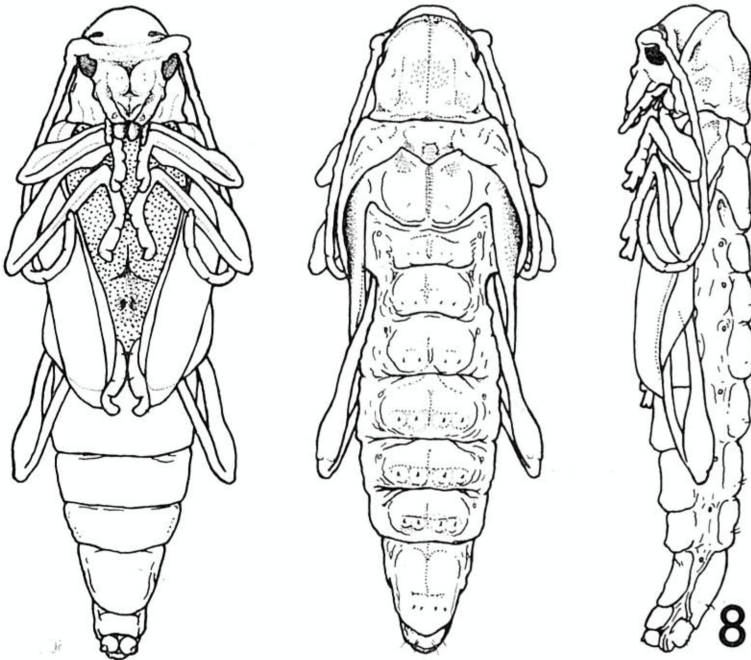


Fig. 8 蛹…… Pupa.

微毛が並び、正中中部後縁はやや丸く隆起し、浅く横ジワが走る。後胸部は左右に2~3本の微毛あり正中溝は浅く走る。上翅端は内側角がやや鋭角に、ゆるく斜めに截断されたごとく丸まる。

各腹節には第1~第7腹節上に左右2本ずつ刺毛を伴った乳頭状突起が並び、第8腹節上には、左右に2~3本の細長い毛が、ほぼ縦に並ぶ。各腿節の後半部は膨大し、中、後肢の腿節と、脛節は重ならず離れて開き、後腿節の末端近く上方には、左右に2つのかすかに隆起したコブ状のものがある。各爪には微細毛が1本ある。



Fig. 9 コデマリ花上の成虫 (室内観察)
An adult on the flower of *Spiraea cantoniensis* (in the cage).

腹面は平滑で、末端には、すべての検体に雌性を示すと考えられる³⁾球状突起が2個並ぶ。体長10.98mm、前胸幅1.58mm、最大体幅2.57mm。被検材料は、1974年8月17日~18日に臥牛山で採集した蛹の中、10個体(生品)を用い、上記の計測は、作図に使用した個体による。

蛹の形態は、すでに報告されている *Molorchini*¹⁰⁾ や、*Dere*^{2, 10, 13)} に似ているが、第1~第7腹節上の2対のトゲ状刺毛と、後半が膨大した各腿節、長い上翅、等を併せて、既知の類似種と区別できる。

ま と め

Kurarua rhopalophoroides HAYASHI クビアカモモブトホソカミキリは、春出現し、種々の花に訪花し、その生殖様式は今のところ判っていないが、雌性単為生殖の可能性がある。また、交尾をせずに産卵した。幼虫はクロガネモチ・ソヨゴの枯死部樹皮下を食進し、10月には9mm前後になり、樹皮下で越冬した幼虫は、翌々年3月~4月には、12~13mmの終令となり、材部に穿孔して蛹室を作る。7~8月にかけて、蛹室内の幼虫は、蛹室入口に向かって前蛹となり、8~9月上旬に蛹化し、蛹期間は16日~25日。羽化した成虫は、蛹室内で越冬し、翌年の4月~5月にかけて、穿孔部の真上に飛孔を作り脱出する。卵・幼虫の形態、蛹室は特異である。

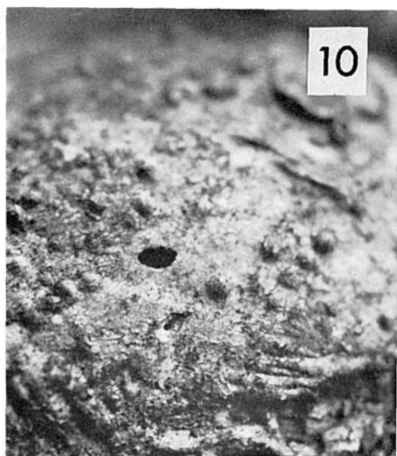


Fig. 10 飛孔……Emergence hole.



Fig. 11 被害樹……Damaged plant.

Summary

The ecological observation of *Kurarua rhopalophoroides* HAYASHI with their forms of immature stages is described

The adults emerged in April to June, and visited the various flowers.

The male and the method of reproduction are unknown.

There is a possibility that they reproduce by thelytokous parthenogenesis. In some instances, eggs were laid in the kerf, but they failed to

develop.

The larvae fed between the bark and wood of dead *Ilex rotunda*, *Ilex pedunculosa*, making a idiomorphic pupal cell in the sapwood during spring of two years after.

Transformation occurred in late summer and the adults emerged in the following spring.

The shape of the egg was unusual.

The larva resembles those of *Molorchini* in general characteristics.

According to the description made by E. A. J. Duffy, (1968), the larva of the present species appears to resemble closely that of *Artimpaza obscura* (Cleomenini), except that the former possesses 3 protuberances on the gena, tubercula on

the ampullae, and a small triangular protrusion at median margin of the front.

Recently, S. Nakamura, et al. (1975) described the larval structure of the present species based on a specimen collected at Nara.

Since the morphological characteristics shown in their report appear to be different in some respects, it is probable that the material employed in their study is different from the present species.

In all pupae examined, 9th abdominal segment protuberates two globoid.

As reported by E. A. J. Duffy (1953), T. Goh (1973), the globular protuberances represent one of the female sexual characters.

文 献 (A B C 順)

- (1) 青野孝昭, 宇野弘之, 重井 博, 脇本 浩 (1970), 岡山県のカミキリムシ, すずむし Vol.19 Nos. 1~2
- (2) Duffy, E.A.J. (1957), A monograph of the immature stages of African timber beetles (Cerambycidae), British Museum (Nat. hist).
- (3) Duffy, E.A.J. (1968), A monograph of the immature stages of Oriental timber beetles (Cerambycidae), British Museum (Nat. hist).
- (4) 郷遠 (1973), カミキリムシ科さなぎの性徴について, げんせい No.25.
- (5) Gressitt, J.L. and Rondon, J.A. (1970), Cerambycid-beetles of Laos, Pacif. Ins. Monogr, No. 24.
- (6) Hayashi, M. (1951), Studies on Cerambycidae from Japan and Its Adjacent Regions, Ent.Rev. Japan, Vol. 5, No. 2.
- (7) 小島圭三 (1959), 日本産カミキリムシの幼虫の形態学的研究, 高知大農学部紀要(6)
- (8) 小島圭三, 中村慎吾, 市川俊英 (1966), カミキリムシ幼虫3種の形態, 比和科学博物館研究報告 No.10.
- (9) 小島圭三, 林 匡夫 (1969), 原色日本昆虫生態図鑑(1), カミキリ編
- (10) 小島圭三, 中村慎吾 (1969), 日本産カミキリムシのさなぎの形態学的研究(1), 高知大学術研究報告 Vol. 18, 農学第9号.
- (11) Kusama, K. and Hayashi, M. (1971), Generic Names and Type species Applied to Japanese Cerambycidae (Coleoptera), Reports of Faculty of Science, Shizuoka Univ., Vol. 6.
- (12) 草間慶一 (1973), 日本産カミキリの生態と分布一覧表, 新しい昆虫採集案内(3)
- (13) 中村慎吾 (1957), ホタルカミキリの幼虫と蛹について, 昆虫25, (1)
- (14) 中村慎吾・今坂正一・小島圭三 (1975), グビアカモモトホソカミキリ幼虫の形態, 比和科学博物館研究報告 No.18.
- (15) 中根猛彦 (1973), 昆虫標本ラベル, 昆虫と自然 Vol. 8, No. 5.
- (16) 重井 博 (1966), グビアカモモトホソカミキリを臥牛山で採集, すずむし Vol.16 No. 1
- (17) 脇本 浩, 山地 治, 渡辺昭彦 (1975), 臥牛山 (高梁市) のカミキリムシについて, すずむし No.111.

日本産ヒゲナガモモフトカミキリ属の再検討

藤 田 宏

A Revision of the Genus *Acanthocinus* GUÉRIN in Japan (Cerambycidae, Col.)

By Hiroshi FUJITA

(Received May 20, 1976; Accepted July 15, 1976)

従来、日本における分布が知られる *Acanthocinus* 属のカミキリは、*A. griseus* (FABRICIUS) ヒゲナガモモフトカミキリ (スジマダラモモフトカミキリ) ただ1種で、戦前に北海道^{2,4,5,7,9,11,13,14} および本州¹³ から報告されていた *A. carinulatus* GEBLER カラフトモモフトカミキリは、その後久しく記録されなかったためか、分布に疑問がもたれ、最近の図鑑^{16,15} や総説²⁰ 類では疑問種としてとり扱われるか、あるいは削除されていた。

筆者は、北海道十勝支庁大雪山麓周辺で得られた多数の *Acanthocinus* を調べた結果、あきらかに2種が混生しており、*A. griseus* 以外のもう1種は、*A. carinulatus* であることを確認したので、ここにその詳細を報告しておく。

カラフトモモフトに関する戦前の文献を調べていくうちに、日本産の *Acanthocinus* についていくつかの新知見を得、また、ヒゲナガモモフトの本州以南のものは原種と区別しうるため、別な1型 (var. *orientalis*) とした大林 (1939)¹² の見解を妥当と考えた。カラフトモモフトの日本における再確認記録をしるすと共に、併せてこれらの知見についてもまとめてみたい。

本文にあたり、草間慶一博士、黒沢良彦博士、小比賀正敬博士、高桑正敏、深町宗通の各氏には種々のご教示をいただき、特に草間博士には文献の便宜をはじめ、多くのご助言を賜った。また、北大の青木重幸氏は北海道大学農学部昆虫学教室保管の標本をお借りする際に便宜を計って下さり、平山洋人、蓮尾篤氏はこの研究のために色々と標本を貸して下さった。さらに、標本写真撮影には中臣謙太郎、高桑正敏の両氏を煩わせた。これらの方々々に深く感謝の意を表したい。

Present address:

2-29-6, Taitô, Taitô-ku, Tôkyô city (〒110)

○ヒゲナガモモフト以外の日本産

Acanthocinus を扱った文献とその研究史

戦前の文献にはヒゲナガモモフト以外の *Acanthocinus* の記録が少なくないが、これらは現在 *Acanthocinus* でないものや、誤って書かれているものなどが多く、整理が必要である。

カラフトモモフトの記録を調べてみると玉貫(1933)⁵ を境に、それ以前の記録では松下 (1932)^{7)*} を除き、学名が *A. oppositus* CHEVR. とされている。玉貫において *oppositus*=*carinulatus* とされているのだが、本文には Junk のカタログに従って訂正したということが書かれているだけで、*oppositus* が *carinulatus* の synonym とされた詳しい理由についてまでは触れられていなかった。そこで、*A. oppositus* なるカミキリがいつ、どこで記載されたものか調べるため、世界のカタログ類を調べてみたが、不思議なことにそのようなカミキリは全く見あたらなかった。戦前の学者は、*A. oppositus* を KRAATZ (1879)¹¹ より引用していると思われるので、調べてみると、確かに「japanischen *oppositus* CHEVR.」なるものはあったが、*Acanthocinus* 属のカミキリではなかった。その前後関係より考えると、次のようなことが推測される。(以下、草間博士のご教示による)

つまり、同文中では *Acanthocinus* のいくつかの種について述べた後、genus が変わっているにもかかわらず、その後続く種名を、genus を書きおとして書いたため、すべてが *Acanthocinus* に含まれる種と誤解されたものと思われる。すなわち、この文中の「japanischen *oppositus* CHEVR.」というカミキリは本来、*Anthoboscus* (トラカミキリの1属) に含まれるもので、*An-*

*) 種名の後に (新称, 未録種) とある。

thoboscus oppositus CHEVR. は、現在では *Chlorophorus signaticollis* CASTELNAU et GORY (ウスグロトラカミキリ) の synonym とされている。

——ということで、一体どのような経緯で *oppositus* (ウスグロトラ) がカラフトモモトにあたると考えられたのかはわからないが、“*Acanthocinus oppositus* CHEVR.” なるカミキリは今までに記載されたことはなく、実在しない種名である。

カラフトモモトを扱った文献のうち、文献番号2, 3, 4, 5, 6, 11では *oppositus*, 7, 8, 9, 10, 13では *carinulatus* とされているが*, *oppositus* として書かれたすべてを *carinulatus* と考えるならば、日本におけるカラフトモモトの初記録は三橋 (1905)²⁾ となり、“カラフトモモト” の和名は前述のように松下 (1932) より使われている。また、松下 (1933)¹⁰⁾ は樺太産の *A. carinulatus* を var. *sachalinensis* として区別し、記載している。

今までに使用された日本産の *Acanthocinus* の和名・学名を整理すると、下記ようになる。

(和名)

シロオビモモトカミキリ^{2,3,4)}など → カラフトモモト
オオシロオビカミキリ⁵⁾ → //

*) TAMANUKI (1933)⁹⁾ の *oppositus*, 三輪・水戸野 (1941)¹³⁾ の *carinulatus* はそれぞれ *oppositus*, *carinulatus* の誤植か誤記。

表1 カラフトモモトとヒゲナガモモトの区別点 (* Plate 3 参照)

	カラフトモモト	ヒゲナガモモト
体 型	全体としてずんぐりしており、頑強な感じをうける	全体として細く、華奢な感じをうける
上 翅	上翅は比較的短い (頭部+前胸：上翅の比=1:2.3) 上翅の幅：長さの比=1:2.1 上翅端はせばまらず、かくばる 上翅の点刻は比較的疎 上翅の微毛 (白色毛, 黄褐色毛) は細く長い	上翅は比較的長い (頭部+前胸：上翅の比=1:2.6) 上翅の幅：長さの比=1:2.5 上翅端はせばまり、丸みをおびる。 上翅の点刻はかなり密 上翅の微毛 (白色毛, 黄褐色毛) は米粒状の短い毛
肢	肢は比較的太く短い 各付節の基部の白色微毛は多く、めだつ	肢は比較的細く長い 各付節基部の白色微毛は少なく、めだたない
触 角	触角は比較的太く短い	触角は比較的細く長い
♀の交尾器	Plate 3, Fig. 1b 参照	Plate 3, Fig. 2b 参照
♀の産卵管	産卵管は比較的短い (上翅の約0.4倍)	産卵管は比較的長い (上翅の約0.6倍) * ただし, ssp. <i>orientalis</i> ではやや短い

ヒノモモトカミキリ²⁾

(学名)

*A. stillatus*²⁾など→現在の *Leiopus stillatus* のこと (ゴマダラモモト)

A. oppositus }
A. alpinnus } → *A. carinulatus*
A. sibiricus }

*A. moirwellus*²⁾ → 未記載種。おそらく、現在のナカバ (ヒノモモト) ヤシモモトかヤマナラシモモトをさしていたものと思われる

○*A. carinulatus* と *A. griseus* の区別点

カラフトモモトとヒゲナガモモトの両種は、互いによく似ており、同定は容易ではないが、見慣れれば体型 (特に上翅の形) その他からすぐ区別することができる。詳しい差異は表1にまとめたが、両種を比較した場合の相対的な差ではわかりにくいかもしれない。その場合、最も確実な同定法は50倍程度の双眼顕微鏡で上翅の微毛を調べることで、カラフトは細長い毛、ヒゲナガは米粒状の毛 (Plate 3, Fig. 1d, 2d 参照) と、一見して区別することができる。

注1) *Acanthocinus* 属のカミキリの上翅斑紋は変化が多く、種の同定にはあまり役立たないが、全体的にカラフトモモトの微毛は白色毛がほとんどで、ヒゲナガモモトは黄褐色毛がかなり混ってくる。これは特に腹節に顕著に現われ、カラフトでは白色毛、ヒゲナガでは黄褐色毛ばかりとなる。

注2) 以上の特徴を用いて判断すると、小島・林 (1969)¹⁸⁾ で、p. 149, pl. 47, f. 1a に図示されている *Acanthocinus* (北海道糠平の♀) は、ヒゲナガモモトでなく、カラフトモモトと思われる。

○未整理の問題点

カラフトモモトの同定は文献その他より行なったが、1つだけ気になる点があった。それは GEBLER がわざわざ *carinulatus* と命名しているのに、上翅には *carina* らしい *carina* はなく、縦の弱いすじがあるだけで、これでは *carina* とは言いがたい。140年以上も前の記載なので、あるいは現在の *carina* とは多少ニュアンスが異なり、この縦すじを *carina* と称していたのかもしれないが、とにかくタイプ標本を見ていないので、その点が気になった。草間

(1973)²⁰⁾によれば、ヒゲナガモモトおよびカラフトモモトの holotype 標本は、それぞれ英博(疑問印つき)とベルリン博に所蔵されているとのことであるが、その後同博士に問い合わせたところ、いずれも現在はそれらの博物館になく、どこにあるのかは不明ということで、タイプ標本を見ることは困難なようである。

今回、本文でカラフトモモトとした種は、手元の標本を見るかぎり、北海道・樺太・朝鮮・満州・シベリアにヒゲナガモモトと共に分布しているようだが、万一真の *carinulatus* がこれときわめてよく似た別種の場合は、松下(1933)¹⁰⁾が樺太産の標本を基に *carinulatus* の1型として記載した*) var. *sachalinensis* を独立種として昇格させねばならない可能性もある。

カラフトモモトは今のところ、大雪山周辺・日高山脈・空知支庁雨竜湖・知床半島(岩尾別)などで得られており、特に大雪山周辺では7~8月に各種針葉樹の伐採木上で、ヒゲナガモモトと共に非常に多くの個体が見られた。今後、カラフトモモトが道内でどのように分布しているか、あるいは本州の東北地方まで進入していないか、など読者諸氏に注意していただきたい。また、見慣れれば材上を這いまわっている個体でも、ヒゲナガモモトかカラフトモモトかの区別をつけることができると思われるので、今後道内で本種を採集する機会のある方は、活動時間・host のようなことですみわけを行っていないか、観察してみていただきたいと思う。

○本州以南のヒゲナガモモトについて

大林(1939)¹²⁾では日本産のヒゲナガモモトを、ヨーロッパ産のものと比較し、1)体が大きいこと、2)♂では触角が体長の約3倍あること、3)♀では産卵管を除いた体長が原亜種の倍近くあること、などの点より、ヒゲナガモモトの1型として var. *orientalis* という新種を与え、区別している。

本州のヒゲナガモモトは大陸のものとは比べ、色々な点で異なっているので、筆者は大林氏の見解を妥当と考えるが、1型というより、むしろ別亜種とした方が適切と思われるので、次にこれを別亜種に昇格させる。本州以南のヒゲナガモモトは大陸や北海道産の原亜種に比べ、1)体が一般に大型、2)上翅において、基部が幅広く翅端へ向うにつれ細まる、3)黄褐色の微毛が多いため、

原亜種に比べ褐色がかっている、4)♂の交尾器が異なる、5)♀の産卵管はカラフトモモトより長い、原亜種に比べると明らかに短いなどの点で区別することができる。(Plate 3 参照)

Acanthocinus griseus orientalis

OHBAYASHI, status nov.

Acanthocinus griseus var. *orientalis*: OHBAYASHI, 1939, Trans. Kansai Ent. Soc. 8, p. 116

K. OHBAYASHI described a new variety, var. *orientalis*, for specimens of *A. griseus*(FABRICIUS) in Honshû and Kyûshû in 1939. but the author thinks it is better to elevate the variety to a rank of the subspecies. Because the specimens in Honshû and Kyûshû are easily distinguished from nominative ones by the following characters; body is larger, base of elytra is broader, pubescences are more yellowish brown, and different figures of male genitalia and female opipositer(as shown in photograph).

ssp. *orientalis* は本州以南に産し、日本でも北海道までは大陸と同じ原亜種が分布する。大林氏の記載は、鳥取県・埼玉県・福岡県で採集された標本に基づいたもので、その時点ではおそらく北海道産のものを見ておられなかったのであろう。

Examined materials

Acanthocinus carinulatus GEBLER

17♂♂13♀♀, 幌加, 15. VII. 1973 17♂♂18♀♀, 幌加, 24. VII~2. VIII. 1975; 2♂♂, 十勝支庁敦沢, 5. VIII. 1975; ; 4♂♂3♀♀, 十勝支庁ニベソツ山, 3. VIII. 1975; 1♂, 空知支庁北母子里, 22. VII. 1975; 1♂, 日高山脈, 22. VII. 1958, …… (Hokkaido; Japan)

2♂♂, 29. VII. 1914, 1♂, 10. VII. 1933, 1♂, 28. VII. 1923……………(Saghalin) 1♂1♀, 16. VI. 1941, 1♀, 2. VII. 1941……………(Manchuria) 1♂……………(Shiberia) 1♂, 27. VII. 1940……………(Korea)

Acanthocinus griseus griseus (FABRICIUS)

10♂♂14♀♀, 幌加, 15. VII. 1973; 1♀, ラウス岳, 18. VII. 1973; 1♂, 峠下, 9. VIII. 1975; 5♂♂7♀♀, 幌加, 24. VII~2. VIII. 1975; 1♂, 敦沢, 5. VIII. 1975; 2♀♀, 北母子里, 22. VII. 1975……………(Hokkaido; Japan) 1♂, 19. VII. 1925……………(Iss. Kuril) 1♂, VII. 1934……………(Saghalin)

Acanthocinus griseus orientalis OHBAYASHI

1♂, 神奈川県横浜市, 20. VI. 1973; 1♂, 横浜市, 19. VII. 1971; 20♂♂20♀♀, 東京都高尾山, 1. VIII. 1975; 多数, 高尾山, 28. VII. 1969……………(Honshû; Japan)

*) 松下(1933)の記載によれば、var. *sachalinensis* の type 標本は北大所蔵となっている。筆者は北大にある国外の *Acanthocinus* をすべて借りてきたが、樺太産の *carinulatus* 5♂♂の内、1♂に「*Acanthocinus carinulatus* var. *sachalinensis*」と松下博士の Det. label がついている標本があっただけで、記載の日付にあたる標本はなかった。

Summary

In this report, the author describes Japanese Genus *Acanthocinus* GUÉRIN (Acanthocini, Cerambycidae). In the results, the author confirms again the records of *A. carinulatus* GEBLER from Hokkaidô which has been questionable since the Post-World War II period in Japanese fauna, and newly arranges Japanese Genus *Acanthocinus* GUÉRIN as follows:

Acanthocinus carinulatus GEBLER

Distribution: Hokkaidô

A. griseus griseus (FABRICIUS)

Distribution: Hokkaidô

A. griseus orientalis OHBAYASHI

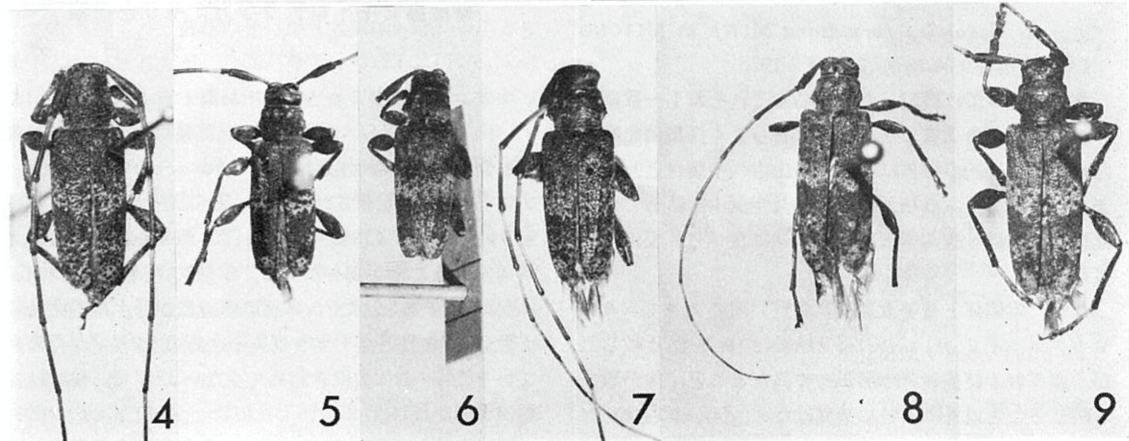
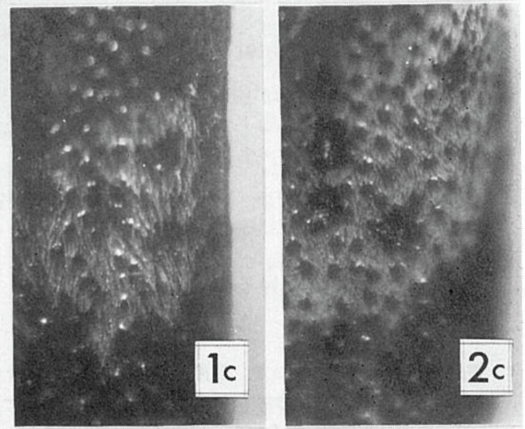
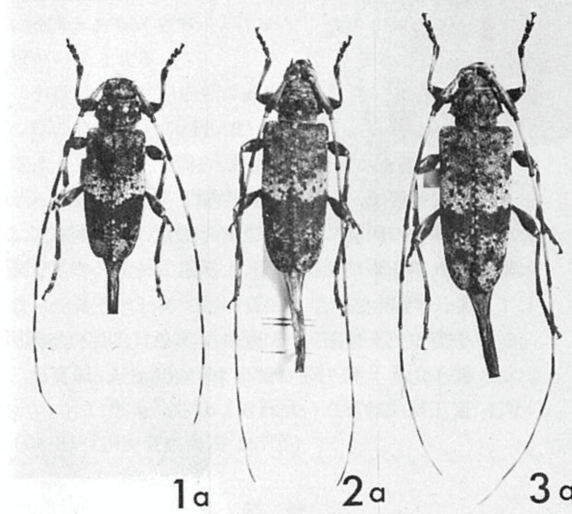
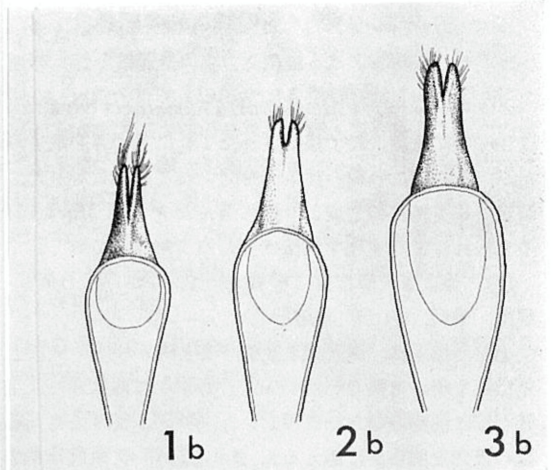
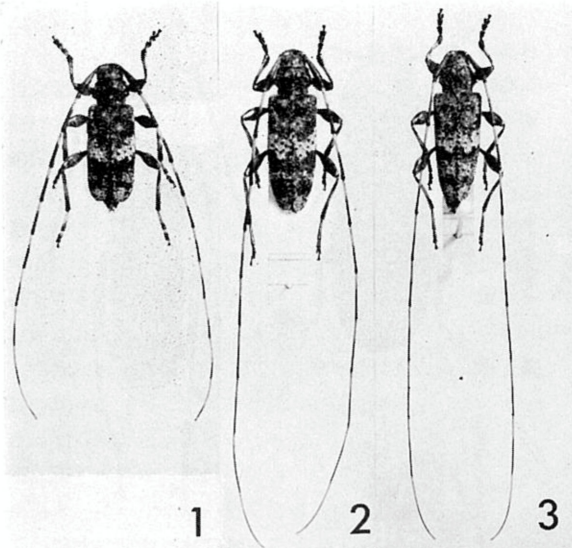
Distribution: Honshû, Shikoku, Kyûshû, Is. Tsushima, Is. Tanegashima, Is. Yakushima

参 考 文 献

- | | |
|---|---|
| 1) KRAATZ (1879): Deutsche Ent. Zetfchr., 23(1), p.82 | 12) K. OHBAYASHI (1939): Trans. Kansai Ent. Soc., 8, p.116 |
| 2) 三橋信次 (1905): 札幌博物学会会報, 1(2), p.206 | 13) 三輪勇四郎・水戸野武夫 (1941): 日本産鞘翅目分類, 天牛科, p.192 |
| 3) S. MATSUMURA (1911): Journ. Agr. Coll. Sapporo, 4(1), p.140 | 14) GRESSITT (1951): Longicornia, 2, p.520 |
| 4) 松下真幸 (1930): 動物学雑誌, 42(495), p.28 | 15) G.O. KRIVOLUTZKAJA(1961): Ent. Obozrenie, 40, p.313 |
| 5) 松村松年 (1931): 通俗日本昆虫図鑑, Ⅲ, p.86, pl. 19, f. 11 | 16) 大林一夫 (1963): 原色日本昆虫図鑑, Ⅱ, Cerambycidae |
| 6) 斎藤孝蔵 (1932): 水原農高創立 25 周年記念論文集, p.7 | 17) 桑山覚 (1967): 南千島昆虫誌, p.151 |
| 7) 松下真幸 (1932): 北海道林業会報, 30(352), p.183 | 18) 小島圭三・林匡夫 (1969): 原色日本昆虫図鑑, I カミキリ編, p.149, pl. 47, f. 1~1a |
| 8) 玉貫光一 (1933): 朝鮮博物学会雑誌, 16, p.15 | 19) G.O. KRIVOLUTZKAJA (1973): Entomofauna of the Kuril Islands, p.99~111 |
| 9) K. TAMANUKI (1933): Ins. Mats., 8(2), p.82 | 20) 草間慶一 (1973): 日本産カミキリの生態と分布一覽表, 新しい昆虫採集案内Ⅲ, p.155 |
| 10) M. MATSUSHITA (1933): J. Fal. Agr. Hokkaidô, Imp. Univ., 34(2), p.391 | |
| 11) 河野広道 (1936): Biogeographica, 1, p.129 | |

Explanation of Plate 3 (p. 21)

- | | |
|--|-----------------------|
| Fig. 1 <i>Acanthocinus carinulatus</i> GEBLER, | ♂ (Horoka, Hokkaidô) |
| Fig. 1a ditto , | ♀ (ditto) |
| Fig. 1b Male genitalia of <i>A. carinulatus</i> GEBLER, | (ditto) |
| Fig. 1c Elytron of <i>A. carinulatus</i> GEBLER, | ♂ (ditto) |
| Fig. 2 <i>A. griseus griseus</i> (FABRICIUS), | ♂ (ditto) |
| Fig. 2a ditto , | ♀ (ditto) |
| Fig. 2b Male genitalia of <i>A. griseus griseus</i> (FABRICIUS), | (ditto) |
| Fig. 2c Elytron of <i>A. griseus griseus</i> (FABRICIUS), | ♂ (ditto) |
| Fig. 3 <i>A. griseus orientalis</i> OHBAYASHI, | ♂ (Yokohama, Honshu) |
| Fig. 3a ditto , | ♀ (Mt. Takao, Honshu) |
| Fig. 3b Male genitalia of <i>A. griseus orientalis</i> OHBAYASHI, | (Yokohama, Honshu) |
| Fig. 4 <i>A. carinulatus</i> GEBLER, ♂ [Siberia] (Siberia in Japanese) | |
| Fig. 5 ditto , ♂ [Manchuria] (Manchû in Japanese) | |
| Fig. 6 ditto , ♂ [Korea] (Chôsen in Japanese) | |
| Fig. 7 ditto var. <i>sachalinensis</i> MATSUSHITA, ♂ [Saghalin] (Karafuto in Japanese) | |
| Fig. 8 <i>A. griseus</i> (FABRICIUS), ♀ [ditto] | (ditto) |
| Fig. 9 ditto , ♂ [Islands Kuril] (Islands Chishima in Japanese) | |



稿 KŌCHŪ 虫

カタモンハナノミの徳之島の記録

高桑 正敏

カタモンハナノミ *Mordellaria humelaris* NOMURA は1960年に奄美大島で採集された1♀に基づき記載されたが、その後この種の採集例を聞いたことがなかった。筆者は奄美諸島徳之島より持ち帰ったタブ類 *Machilus* の立枯れ材より本種を脱出させたので報告しておく。

1♂, 徳之島犬田布岳 (材採取: 23-26. I. 1972, 脱出: 横浜, 28. V. 1972)

上記の標本は、原記載と比較すると体が小さく(頭と尾節板を除いた長さが2.6mm), わずかに体は細く(上翅の幅は前胸の幅とほぼ等しい), 触角はより長く(前胸の後角を明らかに越える), また北隆館の原色日本昆虫大図鑑Ⅱの図と比較すると中央後方の黄色微毛から成る帯ははるかに太く発達するなどいくつかの差が見られるが、これらは♀との差によるものとみなした。

蛇足ながら、上記個体が脱出した立枯れ材からは1972~1973両年に多数のヨツモンハナノミ *Variimorda ihai* *ihai* CHŪJŌ も脱出した。

(〒236 横浜市金沢区六浦町3577)

石垣島におけるカミキリ2種

矢野 立志

筆者は沖縄県石垣島にて、記録しておくべきと思われる下記2種のカミキリを採集しているので報告する。

1. タイワンニセクガタカミキリ

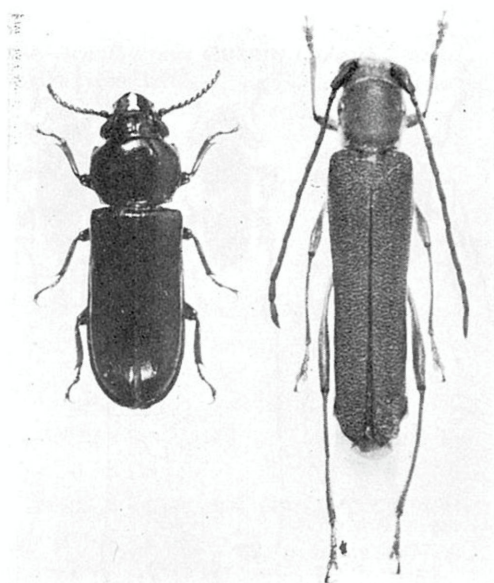
Parandra formosana MIWA et MITONO

1♀, 石垣島オモト岳, 29. VII. 1975

本種は日本では石垣・西表両島でそれぞれ1~数頭ずつの記録があるようだが、最近はずっと採集例を聞かなかった。上記の個体はオモト岳山中(中腹付近)で、モクダチバナ生木の枯死部にあった空洞中に落ちていた死骸で、内臓・腹部背板などはアリに食べられていた。

(写真左)

なお、本個体と奄美大島(八津野)産のアマミニセクワガタカミキリ *P. shibatai* HAYASHI とを比較したが、頭部および前胸背の形がやや異なること、体が黒味を帯びること以外には特に差異はなく、小島・林(1969)*で述べられている“上翅の2対の縦すじ”はタイワンニ



セクワガタばかりでなくアマミニセクワガタにも同様に見られた。

2. ムモンチャイロホソバネカミキリ

Thranis rufescens (BATES)

1♀, 石垣島オモト岳, 20. VII. 1975

オモト岳中腹で、早朝(7時半頃)葉上に静止していたもの。本種の同島における記録は最近、蟹江昇氏により報告されている**が、筆者も採集しているので記録しておく。(写真右)

*) 小島圭三・林匡夫(1969): 原色日本昆虫生態図鑑Ⅰ, カミキリ編, p.2, pl.1, fig.2, 保育社

**) 蟹江昇(1976): 月刊むし61号, p.28

(〒734 広島市皆実町1-18-40)

御蔵島でキイロアラゲカミキリを採集

下村 徹

キイロアラゲカミキリ *Penthides rufoflavus* (HAYASHI) は、1956年8月8日、三重県平倉演習林で採集された1♀を基に新属新種 *Hirakura rufoflava* HAYASHI として記載された¹⁾が、その後 *Hirakura* 属は MATSUSHITA (1933) の創設した *Penthides* 属とシノニムであることが判ったため、本種の学名は *P. rufoflavus* と変更された²⁾。本種は原記載以降、奄美大島にて数頭、また最近はトカラ列島中之島でも2♀♀が得られている³⁾が、個体数はきわめて少ないようで、他には採集例を聞かない。

筆者はこれまでに記録のなかった伊豆諸島御蔵島にて

本種を得たので報告しておきたい。

1♂, 御蔵島川田付近, 22. VII. 1974, 下村徹採集
生葉のピーティングによる。

今までに♂の確かな採集例がないようなので, 体の特長を略記しておく; —頭部と前胸の前縁部および両側は黒褐色。前胸のその他の部分・小楯板・上翅は赤みがかった黄褐色。触角と肢は黒褐色。

頭部・触角・肢はあらく点刻され, 頭部では黄褐色の微毛がやや密に生え, 触角・肢には黒褐色の微毛が密生する。また, 頭部・触角・肢にはかなり長い黒褐色毛が疎生するが, 触角では第1~3節にほぼ限られ, 第4~11節は微毛のみとなる。

前胸は頭部に比べ幅が狭く, やや横に長い長方形(縦横の比=4:5)で, 前縁と基部は同じ幅。前胸はなめらかで, 浅く大きな点刻が不規則にあり, 細くやや長い黄褐色毛が波状に前胸背をおおっているが, 両側に近づくにつれ短かい毛となる。

小楯板は舌状。上翅は基部の幅の2倍以上の長さで, 翅端は丸くなる。全体が赤みがかった黄褐色で, 前胸と同様に上翅の表面はなめらかで光沢をもつ。全体に浅く大きな点刻が不規則にあり, やや立った長くきわめて細い黄褐色毛が密生している。

体の下面はすべて黒褐色で, 金色の微毛が密生する。

体長5.5mm。触角は体長の約1.4倍。触角各節の比は
3.0:0.5:3.4:2.8:2.5:2.3:2.1:2.0:1.8:1.5:



編集後記

かなり前より, 会誌の発行が(大幅に)遅れることを常としていましたが, 今回, 今年分の ELYTRA No. 1 と“さやばね”を一緒に出すことができたので, まがりなりにも正常な状態になりました。

昨年あたりから, いつも編集に追われて, なにか悪いことでもしているような, みじめな日々を送ってきましたが, これでやっと人間らしい生活にもどることができるので, ホッとしています。いつも追われていると, 精神衛生上にもよくないので, この次からは………予定通りに………きちんと………発行していく………つもり………です。

次の ELYTRA, Vol. 4, No. 2 は 11月に発行の予定! 原稿はお早めに。
(藤田 宏)

1.6。

以上, 小楯板の形状は異なるが, 他の頭部・前胸・上翅・触角・各足の色, 体毛の色と状態, 体の下面の色等は HAYASHI¹⁾²⁾の記載とよく一致する。小楯板の形の差はあるいは雌雄によって多少違うのかもかもしれない。

なお, 近年八重山諸島石垣島および西表島で得られている *Penthides* 属の1種³⁾は, 台湾の *P. flavus* に近い種で, 近く楨原寛氏により新種として記載される予定と聞く。入江・草間(1976)⁴⁾でも指摘されているように, 草間(1973)⁵⁾が本種の分布に石垣・西表島を入れたのはこの未記載種の誤りであり, また小島・林(1969)⁶⁾では本種の学名が *P. flavus* とされ, 分布に台湾を含め, *P. rufostavus* と台湾産の *P. flavus* を同一の種として扱ったが, この処置は HAYASHI²⁾により別種として訂正されている。

末筆ながら, 石垣島産の *Penthides* sp. を比較のために貸して下さった藤田宏氏に感謝する。

- 1) HAYASHI (1957): Ent. Rev. Japan, 8, p.47, fig. 3
- 2) HAYASHI (1972): Ent. Rev. Japan, 24, p.41
- 3) 高桑正敏 (1975): 月刊むし54号, p.27, figs.
- 4) 入江平吉・草間慶一 (1976): 月刊むし59号, p.13, pl. fig. 17
- 5) 草間慶一 (1973): 日本産カミキリの生態と分布一覽表, 新しい昆虫採集案内Ⅲ, p.125, 内田老鶴圃新社
- 6) 小島圭三・林匡夫 (1969): 原色日本昆虫生態図鑑 I, カミキリ編, p.141, pl. 45, fig. 5, 保育社
(〒140 品川区大井3-1-17)

ELYTRA Vol. 4, No. 1

昭和51年7月25日 印刷

昭和51年7月31日 発行

編集者 藤田 宏

発行者 草間 慶一

発行所 日本鞘翅目学会

Japanese Society
of Coleopterology

東京都台東区東上野4-26-8

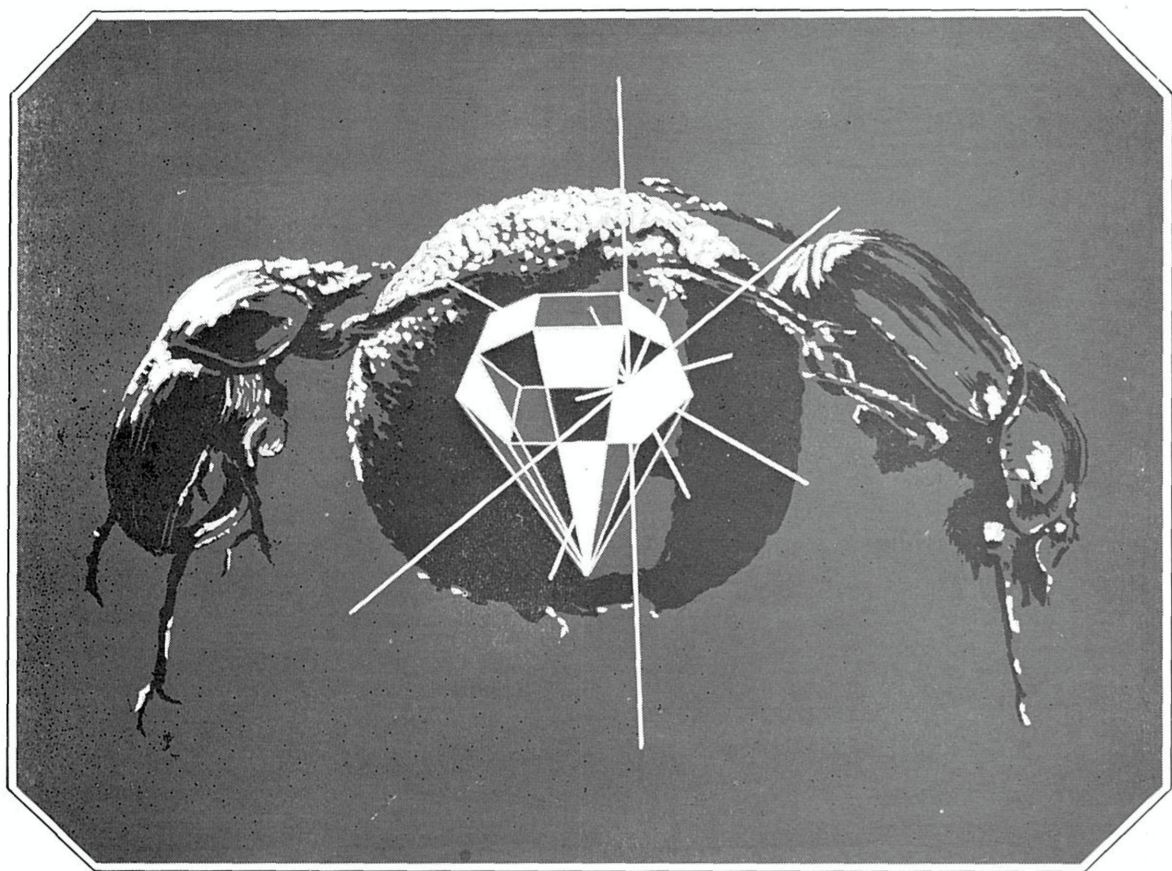
福田惣一方(〒110)

c/o, FUKUDA, 4-26-8,

Higashi-Ueno, Taitō-ku,

Tōkyō-city, Japan

印刷 (株)大和印刷



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 《ドイツ型標本箱》

自然はますます大切なものとなってきました。この不思議な世界を解明する貴重な手掛りとなる昆虫標本は、価値あるものとして永久に保存したいものです。

そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届けします。

*すばらしい特長

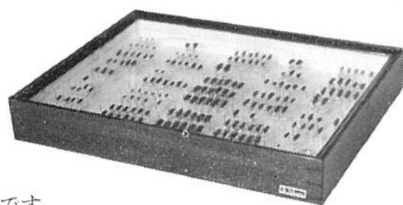
- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラゾールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底

●高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあり。

〒113 東京都文京区湯島二丁目二五番三(八十一)四五四七
郵便振替 東京一三三四七九

(有)タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和51年4月現在のものです

日本鞘翅目学会会則

1. 会名：本会は日本鞘翅目学会〔The Japanese Society of Coleopterology〕と称する。
2. 目的：本会は甲虫研究の進展を計り、あわせて甲虫研究者相互の親睦を深めることを目的とする。
3. 総会：年1回の総会を開くものとする。
4. 活動：本会は次の活動を行なう。
 - a. 機関誌「ELYTRA」の発行。
 - b. 第2会誌「さやばね」の発行。
 - c. その他、甲虫に関する臨時出版物の発行。
 - d. 年1回の総会。
 - e. その他、必要と思われる一切の活動。
5. 会員：本会の会員は正会員・維持会員および特別会員からなり、正会員・維持会員は所定の会費を納めるものとする。
6. 役員：本会には会長ならびに若干名の役員をおくものとする。
7. 会計：会計年度は1ヵ年とし、会計報告を行なう。
8. 入会：本会に入会を希望するものは、指定の会員カードに住所・氏名等を記入し、入会金に1年分以上の会費を添え、事務局に申し込むものとする。
9. 会則の変更：上記会則の変更は総会にて承認される。

細 則

- A. 役員は当分の間、下記とする。役員は年2回行なわれる ELYTRA 掲載の原著論文の審査、および会務の決定・運営にあたる。

草間慶一（会長）、衣笠恵士（副会長）、露木繁雄、小宮次郎、中村俊彦、
福田惣一、大木 裕、高桑正敏、藤田 宏

- B. 入会金および年会費は下記とする。（前納）

	1974~1976年度	1977年度以降
入 会 金	500	500
年 度 費	正 会 員 2,000 維持会員 5,000	一 般 3,000
		大学生および大学受験生 2,000
		中・高校生 1,000
		5,000

注1) 入会金は入会の年次のみ必要。

注2) 維持会員は一口につき ¥5,000 で、会誌は2部ずつ送付される。

注3) バックナンバーの誌代は年会費の金額に準ずる。

- C. 本会の事務局および編集局は当分の間、下記とする。

○事務局（入会の申し込み、会費の納入、バックナンバーの申し込み、その他事務一切）

〒110 台東区東上野4-26-8 福田惣一方

○編集局（投稿および投稿に関する問い合わせなど、編集関係一切）

〒110 台東区台東2-29-6 藤田 宏方

ELYTRA Vol. 4 No. 1 目次

原 著

- 益本仁雄 (MASUMOTO, K.): 台湾産食糞コガネムシ解説〔2〕
(A Revision of the Coprophagid-beetles from Formosa [2])..... 1
- 郷 遠・田村 保・分島徹人・山地 治 (GOH, T., TAMURA, T., WAKEJIMA, T. & YAMAJI, O.):
クビアカモモプトホンカミキリの生態について
(Ecological notes on *Kururua rhopalophoroides* HAYASHI (Cerambycidae, Col.))..... 9
- 藤田 宏 (FUJITA, H.): 日本産ヒゲナガモモプトカミキリ属の再検討
(A Revision of the Genus *Acanthocinus* GUÉRIN in Japan (Cerambycidae, Col.))17
- 高桑 正敏: カタモンハナノミ徳之島の記録.....22
- 矢野 立志: 石垣島におけるカミキリ2種.....22
- 下村 徹: 御蔵島でキイロアラゲカミキリを採集.....22

編集後記.....23

表紙 (マークオサムシ).....藤田 宏